

- 第十三條 第三條第六條第八條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ハ郡區役場ヲ經營察署ハ直ニ所轄
廳警視廳北海道廳
府廳廳ヲ云フニ届出ヘシ
- 第十四條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示シ且近接ノ地方廳ニ報告スヘシ但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管内ニ告示スヘシ
- 第十五條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ届ヲ得タルトキハ毎土曜日其旨ヲ農商務大臣ニ届出ツヘシ
- 第十六條 警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ届ヲ得タルトキ及管下接近ノ地方ニ傳染病蔓延シ兆候アリトノ報告ヲ得タルトキハ農商務大臣ノ允許ヲ得テ豫防線ヲ劃シ獸類ノ出入往來ヲ停止スルヲ得
- 第十七條 牛疫蔓延ノ際ニ限リ其患畜ニ接近シタル牛ハ假令健康ノモノナリトモ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ於テ農商務大臣ノ允許ヲ經タル後之ヲ撲殺セシムルヲ得但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ全額ヲ下付スヘシ
- 第十八條 牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ農商務大臣ノ允許ヲ得タル後其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ手當金ヲ下付スヘシ

第十九條 此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラズ

(九七) 出生死去出入寄留届(明治十九年九月二十八日
內務省令第十九號)

明治四年四月四日布告戸籍法第五則出生死去出入等届出方及明治五年正月第四號布告第八項寄留者届出方左ノ通相定メ來ル十二月一日ヨリ施行ス

- 第一條 出產アリタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ
- 第二條 死者アリタルトキハ埋葬以前ニ届出ヘシ
- 第三條 失踪者復歸シ又ハ其行方知レタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ
- 第四條 廢戶主廢嫡改名復姓身分變換其他願濟ノ上戸籍ニ登記スヘキ事項ハ其許可ノ指令ヲ受領シタル日ヨリ十日以内ニ届出ヘシ
- 第五條 前數條ニ記載シタル事項ハ戸主ヨリ届出ヘシ戸主未定又ハ不在ナルトキハ親族三人以上又ハ其事ニ關係アル者ヨリ本籍地戸長ニ届出ヘシ但本籍地外ニアルトキハ現在地戸長ニ届出且同時ニ本籍地戸長ニ届書ヲ發送スヘシ
- 第六條 他府縣又ハ他郡區ニ寄留シタルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ借地借家ニ於テハ寄留者及地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戸長ニ届

出且同時ニ本籍地戸長へ届書ヲ發送スヘシ
 第七條 寄留地ヲ去ルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ借地借家ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以内ニ其地戸長ニ届出ヘシ
 第八條 寄留者本籍地ニ歸リタルトキハ戸主又ハ本人ヨリ十日以内ニ届出ヘシ
 第九條 正當ノ理由ナクシテ前數條ニ違背シタル者ハ二十錢以上一圓二十五錢以下ノ科料ニ處ス

(九八)所得稅法(明治二十年三月十九日勅令第五號布告)

第一條 凡ソ人民ノ資産又ハ營業其他ヨリ生スル所得金高一箇年三百圓以上アル者ハ此稅法ニ依テ所得稅ヲ納ムヘシ但同居ノ家族ニ屬スルモノハ總テ戸主ノ所得ニ合算スルモノトス
 第二條 所得ハ左ノ定則ニ據テ算出スヘシ
 第一公債證書其他政府ヨリ發シ若クハ政府ノ特許ヲ得テ發スル證券ノ利子營業ニアラサル貸金預金ノ利子株式ノ利益配當金官私ヨリ受クル俸給手當金年金恩給金及割賦買與金ハ直ニ其金額ヲ以テ所得トス
 第二第一項ヲ除クノ外資産又ハ營業其他ヨリ生スルモノハ其種類ニ應ジ收入金高若クハ

收入物品代價中ヨリ國稅地方稅區町村費備荒儲蓄金製造品ノ原質物代價販賣品ノ原價種代肥料營利事業ニ屬スル場所物件ノ借入料修繕料雇人給料負債ノ利子及雜費ヲ除キタルモノヲ以テ所得トス
 第三第二項ノ所得ハ前三箇年間所得平均高ヲ以テ算出スヘシ但所得收入以來未タ三年ニ滿タサルモノハ月額平均ヲ得難キモノハ他ニ比準ヲ取リテ算出スヘシ
 第三條 左ニ掲クルモノハ所得稅ヲ課セス
 第一軍人從軍中ニ係ル俸給
 第二官私ヨリ受クル旅費傷痍疾病者ノ恩給金及孤兒寡婦ノ扶助料
 第三營利ノ事業ニ屬セサル一時ノ所得
 第四條 所得稅ノ等級及稅率左ノ如シ

等級	所得金	稅率
第一等	所得金高三萬圓以上	百分ノ三
第二等	所得金高二萬圓以上	百分ノ二半
第三等	所得金高一萬圓以上	百分ノ二
第四等	所得金高千圓以上	百分ノ一半
第五等	所得金高三百圓以上	百分ノ一

但所得金高ハ圓位未滿ノ端數ヲ算セズ

第五條 所得稅ハ前半年分ヲ其年九月ニ後半年分ヲ翌年三月ニ納ムヘシ

第六條 此稅法ニ依リ稅金ヲ納ムヘキ所得アル者ハ其年所得ノ豫算金高及種類ヲ記シ毎年四月三十日マテニ居住地ノ戶長ヲ經テ郡區長ニ届出ヘシ

第七條 各郡區役所管轄内ニ七名以下ノ所得稅調查委員ヲ置キ毎年調查委員會ヲ開キ所得稅ニ關スル調査ヲ爲サシム調査委員定數ノ外五名以下ノ補缺員ヲ置キ缺員ノ補充ニ備フヘシ

調査委員及補缺員ニ選ハレタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第八條 調査委員ハ其郡区内ノ選舉ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 調査委員ノ選舉人被選舉人ハ二十五歳以上ノ男子ニシテ其区内ニ現住シ所得稅ヲ納ムル者ニ限ル但府縣會規則第十三條第一款第二款第三款第四款ニ觸ル、者ハ被選人タルコトヲ得ス同條第一款第二款第三款ニ觸ル、者ハ選舉人タルコトヲ得ス

第十條 郡區長ハ各町村内ニ五名ヨリ多カラサル町村選舉人ノ員數ヲ定メ其町村人民中第九條ノ資格ヲ有スル者ヲシテ互選セシメ但便宜ニヨリ數町村ヲ合シテ五名ヨリ多カラサル選舉人ヲ定ムルコトヲ得

町村選舉人ハ第九條ノ範圍内ニ於テ調査委員及補缺員ヲ選舉スヘシ

第十一條 調査委員ノ任期ハ滿四年トシテ二年毎ニ全數ノ半ヲ改選ス但第一回ノ改選ハ抽籤ヲ以テ其退任者ヲ定ム

第十二條 調査委員ノ手當旅費其他調査ニ關スル費用ハ國庫ヨリ之ヲ支給ス

第十三條 郡區長ハ第六條ノ屆書ニ據リ所得金高下調査ヲ製シ其屆書ト共ニ調査委員會ニ付スヘシ

第十四條 郡區長ハ納稅者ト認ムルモノニシテ第六條ノ期限ヲ過キテ其届出ヲ爲サ、ル者アルトキハ所得金高ノ見積ヲ立テ之ヲ調査委員會ニ付スヘシ

第十五條 調査委員會ハ郡區長ノ招集ニ由リ之ヲ開ク調査委員會ノ會長ハ郡區長ヲ以テ之ニ充ツ郡區長缺席スルトキハ會員ノ互選ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 調査委員會ハ會員過半数出席スルニアラサレハ會議ヲ開クコトヲ得ス會議ハ出席員ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ可否スル所ニ依ル但自己ノ所得ニ關スルトキハ其會議ニ與ルコトヲ得ス

第十七條 郡區長ハ調査委員會ノ決議ニ據リ各納稅者ノ所得稅等級金額ヲ定メ之ヲ納稅者ニ達スヘシ

第十八條 郡區長ハ調査委員會ノ決議ニ關シ意見アルトキハ府縣知事ニ具狀シ指揮ヲ請フヘシ

第十九條 納稅者ニ於テ所得稅ノ等級金額ヲ不當トスルトキハ其違ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ所得金高明細書及其證憑トナルヘキモノヲ添ヘ府縣知事ニ申出ルコトヲ得但此場合ニ於ケルモ其税金ハ違ヲ受ケタル金額ニ從テ之ヲ納ムヘシ

第二十條 府縣知事ハ第十八條第十九條ノ場合ニ於テハ府縣常置委員會ニ付シテ調査セシメ其決議ニ據テ之ヲ處分スヘシ但其處分納稅後ニ涉ルトキハ稅額ノ不足アルモノハ之ヲ追徴シ過剩アルモノハ之ヲ還付スヘシ

第二十一條 調査委員會又ハ常置委員會ハ此稅法ニ關シ調査上必要ト認ムルトキハ納稅者ニ尋問スルコトヲ得

第二十二條 調査委員其他所得稅ノ調査ニ關スル者ハ納稅者ノ資産及所得ニ係ル事件ヲ他ニ漏洩スヘカラス

第二十三條 納稅者其納稅期前ニ於テ所得金高十分ノ五以上ヲ減損シタルトキハ郡區長ニ申出ルコトヲ得郡區長ハ事實ヲ審査シテ其稅額ヲ減シ所得金高一箇年三百圓ヲ下ルモノハ之ヲ免稅スヘシ但既納ノ税金ハ之ヲ還付セス

第二十四條 所得金高ヲ隱蔽シテ通稅シタル者ハ其通稅金高三倍ノ罰金ニ處ス但自首スル者ハ其税金ヲ追徴シ其罪ヲ問ハス

第二十五條 第二十二條ヲ犯シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 第六條ノ届出ヲ爲サ、ル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十七條 此稅法ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不諭罪及減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

第二十八條 此稅法施行ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

第二十九條 此稅法ハ明治二十年七月一日ヨリ施行ス

但北海道沖繩縣及東京府管轄小笠原島伊豆七島ニ於テハ官府ヨリ受ケル俸給手當年金及恩給金ノ外ハ當分ノ内之ヲ施行セス

附則

本法第六條ノ届書ハ本年ニ限リ七月三十一日マテニ差出スヘシ

(九九)所得稅法施行細則(明治二十年五月五日大藏省令第八號)

第一條 戶主ニ所得ナクシテ同居ノ家族ノミニ所得アル場合ニ於テモ一家内ニ屬スルモノハ總テ合算ノ上其戶主ノ名ヲ以テ届出納稅スヘキモノトス

第二條 稅法第二條第三項ニ依リ所得ヲ算出スルハ其年所得ヲ生スヘキ現在ノ資産又ハ現在ノ業務ニ應シ前三年平均若クハ月額平均ノ歩合ニ依リ又ハ他ノ比準ニ依ルヘキモノトス

第三條 物品ニテ收入スル所得ハ其相當價格ヲ以テ代金ヲ算出スヘシ

第四條 税法第六條ノ届書ハ別紙第一號書式ニ依ルヘシ

第五條 左ニ掲クル者ハ一定ノ地ニ其納稅管理人ヲ定メ戶長ヲ經テ郡區長ニ届出此税法施行ニ關スル諸般ノ事ヲ辨セシムヘシ

一 此税法ヲ施行セサル地ニ居住シ本法施行ノ地ニ於テ生スル所得金一箇年三百圓以上ヲ收入スル者

一 内外國ニ旅行シ又ハ外國若クハ此税法ヲ施行セサル地ニ寄留スル納稅者

第六條 一人ニシテ數箇所ニ於テ所得ヲ收入スル者ハ其居住地ノ郡區長ニ届出ヲ爲スト同時ニ別紙第二號書式ニ依リ其所得ヲ收入スル各地ノ郡區長ニ届出ヘシ

第七條 郡區長第六條ノ届出ヲ受クルトキハ之ヲ其納稅地ノ郡區長ニ送付スヘシ但其届出高ニ對シ意見アルトキ別ニ其意見ヲ附スヘシ

第八條 納稅者他ノ郡區役所々轄内ニ轉居セントスルルル及ヒ轉居シタルルルハ各其地ノ戶長ヲ經テ郡區長ニ届出ヘシ

第九條 郡區長第八條ノ他ニ轉居セントスル者ノ届出ヲ受タルトキハ直チニ轉居者ノ所得稅ニ係ル一切ノ事項ヲ其轉居先ノ郡區長ニ通報スヘシ

第十條 郡區長ハ其所轄内ニ於テ納稅者ト認ムルモノ、所得ニ關シ調査上必要ナル場合ニ於テハ各地方ノ會社若クハ一個人ニ對シ其事項ノ問合ヲ爲スコトヲ得

第十一條 郡區長ハ調査委員選舉ノ爲メ税法第六條ノ届出ニ依リ毎年五月納稅者ノ住所姓名ヲ其管内ニ公告スヘシ

第十二條 調査委員會及ヒ調査委員選舉ニ關スル細則ハ府縣知事之ヲ定ム

第十三條 調査委員ヲ辭スルコトヲ得ル者ハ郡區長ニ於テ己ムヲ得スト思料スル事故アルモノニ限ル

第十四條 調査委員會ノ決議書ハ會長及委員二名以上之ニ署名スヘシ

第十五條 所得稅ノ等級金額ハ別紙第三號書式ニ依リ毎年八月十日マテコ之ヲ達スヘシ

第十六條 區長ニ於テ直ニ戶長ノ事務ヲ行フ區内ニ在テハ府縣知事ノ見込ヲ以テ大藏大臣ノ認可ヲ受ケ一區内ヲ數部ニ劃シ每部ニ五名以下ノ臨時取調掛ヲ置キ區長ノ指揮ニ從ヒ所得稅調査ニ關スル下調ヲ爲サシムルコトヲ得

第十七條 税法第二十九條但書ノ所得ニ關スル等級金額ハ北海道廳長官東京府知事沖繩縣知事之ヲ査定スヘシ

第十八條 調査委員招集ニ應セサルカ又ハ會員過半數出席セス若クハ其他ノ事故ニ依リ第十五條ノ等級金額達期限マテニ調査ヲ了セサルルルハ郡區長ニ於テ等級金額ノ意見ヲ付シ府縣知事ニ差出シ府縣知事ハ之ヲ大藏大臣ニ具狀シテ指揮ヲ請フヘシ

第十九條 第五條ニ違ヒ又ハ第六條第八條ノ届出ヲ怠リタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以

下ノ科料ニ處ス

附則

本年ニ限リ第十一條ノ公告ハ九月第十五條ノ達ハ十一月ニ之ヲ爲スヘシ
書式略ス

(一〇〇)新聞紙條例(明治二十年十二月二十八日勅令第七十五號)

第一條 新聞紙ヲ發行セントスル者ハ發行ノ日ヨリ二週日以前ニ發行地ノ管轄廳(東京府ハ
警視廳)ニ經由シテ内務省ニ届出ヘシ

第二條 新聞紙發行ノ届書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

- 一 題號
- 二 記載ノ種類
- 三 發行ノ時期
- 四 發行所及印刷所
- 五 發行人編輯人及印刷人ノ氏名年齢
編輯人ハ二人以上アルトキハ其主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者タルヘシ但紙面ニ部
門ヲ分テ其各部門ニ主任編輯人ヲ設クルコトヲ得

第三條 届出ヲ爲シタル後、題號、記載ノ種類又ハ發行人ヲ變更セントスルトキハ二週日以前ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ

發行ノ時期發行所印刷所編輯人印刷人ニ變更アリタルト一週日以下ニ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ

第四條 發行人死去シ又ハ其法律上其資格ヲ失ヒタルトキハ一週日以下ニ發行人ヲ定メ第一條ノ手續ニ從ヒ届出ヘシ

第五條 發行ノ届出ヲナシタル日又ハ發行休止ノ日ヨリ五十日ヲ過キテ發行セザルトキハ其届出ノ効ヲ失フモノトス

第六條 内國人ニシテ滿二十歳以上ノ男子ニ非レハ發行人印刷人トナルコトヲ得ス
公權ヲ剝奪セラレタル者及公權ヲ停止セラレタル者其停止間、發行人、編輯人、印刷人トナルヲ得ス

第七條 編輯人印刷人ハ互ニ相兼スルコトヲ得ス

第八條 發行人ハ保證トシテ左ノ金額ヲ届書ト共ニ管轄廳(東京府ハ
警視廳)ニ納ムヘシ

- 一 東京ニ於テハ千圓
- 一 京都大坂横濱兵庫神戸長崎ニ於テハ七百圓
- 一 其他ノ地方ニ於テハ三百五十圓

一 一月三回以下發行スルモノハ各前記ノ半額

保證金ハ時價ニ準シタル公債證書又ハ國立銀行ノ預手形ヲ以テ之ヲ納ムルコトヲ得
學術、技藝、統計、官令又ハ物價報告ニ關スル事項ノミヲ記載スルモノハ本條ノ限リニア
ラス

第九條 保證金ハ新聞紙ノ發行ヲ廢止シ又ハ其發行ヲ禁止セラレタルキハ之ヲ還付ス

第十條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サヌ又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ
納メヌシテ發行スルモノハ正當ノ届出ヲナシ又ハ保證金ヲ納ムルマテ警視總監又ハ地方
長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

第十一條 新聞紙ハ每號ニ發行人、編輯人、印刷人ノ氏名發行所ヲ記載スヘシ

發行人、印刷人ノ外何等ノ名義ヲ以テスルニ拘ラス新聞紙又ハ記載ノ條項ニ署名スル者
ハ總テ編輯人ト共ニ其責ニ當ラシム

第十二條 新聞紙ハ其發行毎ニ先ツ内務省ニ二部管轄廳東京府ハ警視廳及管轄治安裁判所檢事局ニ
各一部ヲ納ムヘシ

第十三條 新聞紙ヲ記載シタル事項錯誤ニ付キ其項ニ關スル當人又ハ關係アルヨリ正誤又
ハ正誤書辨駁書ノ掲載ヲ求メタル時ハ其求ヲ受ケタル後其次回又ハ第三回ノ發行ニ於テ
正誤ヲナシ又ハ正誤書辨駁書ノ全文ヲ掲載スヘシ若シ正誤書辨駁書ノ字數原文ノ二倍ヲ

超過スルトキハ其超過ノ字數ニ付キ其新聞社ノ定メタル普通廣告料ト同一ノ代價ヲ要求
スルコトヲ得

正誤辨駁ハ原文ト同號ノ活字ヲ用テ同一ノ欄内ノ首部ニ掲載スヘシ

正誤辨駁ノ文章若ハ趣旨法律ニ觸ル、トキ又ハ之ヲ求ムル者其氏名住所ヲ明記セサルト
キハ掲載フルヲ要ス

第十四條 官報ハ其他新聞紙ヨリ抄録セシ事項ニシテ其官報又ハ新聞紙ニ於テ正誤又ハ正誤
書辨駁書ヲ掲載シタルキハ當人又ハ關係アル者ノ求ナシト雖モ其新聞紙ヲ得タル後其次
回又ハ第三回ノ發行ニ於テ正誤スヘキ前條ノ例ニ依ル但廣告料ヲ要求スルコトヲ得ス

第十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ裁判ヲ受ケタルトキハ其新聞紙ノ次回發行ニ於
テ宣告ノ全文ヲ掲載スヘシ

第十六條 重罪輕罪ニ關スル事項ハ公判ニ附セサル以前ニ於テ之ヲ記載スルコトヲ得ス

第十七條 刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ記載スルコトヲ得ス

刑事ノ被告人又ハ刑律ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲メニスル文書ヲ掲載ス
ルコトヲ得ス

第十八條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非レハ詳略ニ
拘ス之ヲ記載スルコトヲ得ス

官廳ノ議事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ハラヌ之ヲ記載スルコトヲ得ス

第十九條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル新聞紙ハ内務大臣ニ於テ其發行ヲ禁止シ若クハ停止スルコトヲ得

第二十條 新聞紙ノ發行ヲ禁止シ若クハ停止シタルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ發賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十一條 外國ニ於テ發行シタル新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムルトキハ内務大臣ハ其新聞紙ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

第二十二條 陸軍大臣ハ特ニ命令ヲ發シテ軍隊軍艦ノ進退又ハ軍機軍略ニ關スル事項ノ記載ヲ禁スルコトヲ得

第二十三條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ公訴ヲ起ストキハ檢察官ハ假ニ其新聞紙ヲ差押フルコトヲ得

裁判官ハ犯罪ノ情狀ニ依リ差押ヘタル新聞紙ヲ沒收スルコトヲ得

第二十四條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ訴訟ヲ起シタルトキ原告ニ於テ其新聞紙ニ署名シタル編輯人ハ實際主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者ニアラスシテ他ニ主任編輯人アル

コトヲ證明シタル場合ニ於テハ裁判官ハ其署名シタル編輯人及實際ノ主任編輯人ヲシテ共其責ニ當ラシムヘシ

第二十五條 新聞紙ニ記載シタル事項ニ付キ誹毀ノ訴アル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除クノ外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス専ラ公益ノ爲メニスルモノト認ムルキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第二十六條 裁判確定ノ日ヨリ一週日以内ニ裁判費用及ヒ罰金ヲ完納セヌ又ハ損害ヲ賠償セサルトキハ保證金ヲ以テ之ニ充ツヘシ仍ホ足ラサルトキハ刑法徵收處分ニ依ル

保證金ヲ以テ裁判費用賠償及罰金ニ充テタルトキハ發行人ハ管轄廳東京府ハノ通知ヲ得タル日ヨリ一週日以内ニ其缺額ヲ完納スヘシ若シ完納セサルトキハ其之ヲ完納スルニ至ルマテ警視總監又ハ地方長官ニ於テ其發行ヲ差止ヘシ

第二十七條 第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲サヌ又ハ第六條第七條第十一條第十二條ノ犯シ又ハ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ニシテ保證金ヲ納メヌシテ發行シタルトキハ發行人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス但詐稱ノ罪ヲ犯スモノハ罰發行人ニ同シ

第一條第三條第四條ノ届出ヲ爲スモ實ヲ以テセサルトキハ發行人一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八條ノ末項ニ屬スル新聞紙ニシテ保證金ヲ納ムヘキ新聞紙ノ事項ヲ記載シタルトキハ編輯人罰前項ニ同シ

第二十八條 第十三條第十四條第十五條ニ違フトキハ編輯人ヲ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 第十六條第十七條第十八條ニ違フトキハ編輯人ヲ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 第二十一條ニ違ヒ發賣頒布ヲ爲ス者ハ罰前條ニ同シ

第三十一條 第二十二條ニ違フトキハ發行人編輯人ヲ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條 政体ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ論說ヲ記載シタルトキハ發行人編輯人印刷人ヲ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第三十三條 猥褻ノ新聞紙ヲ發行スルトキハ發行人編輯人ヲ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十四條 第十三條ノ場合ニ於テ私事ニ係ルモノハ被害者ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第三十五條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用井ス

第三十六條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ六箇月トス

第三十七條 時々ニ發行スル雜誌ノ類ハ出版條例ニ依ルモノヲ除クノ外皆此條例ニ依ル
(一〇一)出版條例(明治二十年十二月二十一日勅令第七十六號)

第一條 凡ソ機械舍密其他何等ノ方法ヲ以テスルヲ問ハス文字圖畫ヲ印刷シテ之ヲ發賣シ又ハ頒布スルヲ出版ト云ヒ其文書ヲ著述シ又ハ編纂シ若クハ圖畫ヲ作爲スルモノヲ著作

者ト云ヒ發賣頒布ヲ擔當スル者ヲ發行者ト云ヒ印刷ヲ擔當スル者ヲ印刷者ト云フ

第二條 新聞紙又ハ時々ニ發行スル雜誌ヲ除クノ外文書圖畫ノ出版ハ總テ此條例ニ依ル可シ但雜誌ニシテ專ラ學術技藝ニ關スル事項ヲ記載スルモノハ内務大臣ノ許可ヲ得テ此條例ニ依ルコトヲ得

第三條 文書圖畫ヲ出版スルトキハ發行ノ日ヨリ到達シ得可キ日數ヲ除キ十日前製本三部ヲ添ヘ内務省ヘ届出ヘシ

第四條 官廳ニ於テ文書圖畫ヲ出版スルキハ其官廳ヨリ發行前製本三部ヲ内務省ニ送付スヘシ

第五條 出版届ハ著作人又ハ其相續者及發行者連印ニテ之ヲ差出スヘシ但非賣品ハ著作人ノミニテ届出ルコトヲ得

著作者又ハ其相續者ヲ知ルヘカラサルトキハ其由ヲ記シ發行者ヨリ差出スヘシ
學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ノ届ハ其學校會社等ヲ代表ス
ル者發行者ト連印シテ之ヲ差出スヘシ

第六條 文書圖書ノ發行者ハ文書圖書ノ販賣ヲ以テ營業トスル者ニ限ル但著作者又ハ其相
續者ハ發行者ヲ兼スルコトヲ得

第七條 文書圖書ヲ印刷スル者ハ其發行ト否トヲ問ハス印刷ノ年月日及印刷者ノ氏名住所
ヲ記載シ其發行ニ係ルモノハ發行者ノ氏名住所ヲ併セテ記載スヘシ

第八條 社則熟則引札諸藝ノ番付普通ノ書式アル諸種ノ用紙又ハ證書ノ類ハ第三條第六條
ニ依ルヲ要セス

第九條 文書圖書ノ冊號ヲ逐ヒ順次ニ出版スル者ハ其都度第三條ノ手續ヲ爲スヘシ但雜誌
ノ類ニ在テハ内務大臣ノ許可ヲ經テ其手續ヲ省略スルコトヲ得

第十條 一タヒ出版届ヲ爲シタル文書圖書ノ再版ハ出版届ヲ要セスト雖モ若シ改正増減シ
又ハ註解附録繪圖等ヲ加ヘタルモノハ仍ホ第三條ニ依ルヘシ

第十一條 演說者ハ講義ヲ筆記シテ一部ノ書ト爲スキハ演說者ハ講義者ヲ以テ著作者トス
但演說者ハ講義者ノ許諾ヲ經スシテ出版シタルモノニ關シテハ其演說者若ハ講義者ハ著
作ノ責ニ任セス

他人ノ講義又ハ公然ナル演說ハ其講義者又ハ演說者ノ許諾ヲ經ルニ非レハ其筆記ヲ出版
スルコトヲ得ス但本項ニ違フ者ハ版權條例ニ依リ其責ニ任セシム

第十二條 數人ノ著作者ハ數人ノ講義演說ヲ編纂シテ一部ノ書ト爲スモノハ編纂者ヲ著作
者ト見做ス可シ

前條第一項ノ但書及第二項ハ本條ニ適用スヘシ
第十三條 翻譯ハ翻譯者ヲ以テ著作ト見做スヘシ但翻譯トハ漢文ヲ延譯スルモノヲモ包含
ス

第十四條 學校會社協會等ニ於テ著作ノ名義ヲ以テ出版スル文書圖書ハ其出版届ヲナス者
ヲ以テ著作者ト見做スヘシ

第十五條 公ニセサル官ノ文書及上書建白請願書ハ當該官廳ノ許可ヲ得ルニ非サレハ詳略
ニ拘ハラヌ之ヲ出版スルコトヲ得ス

官廳ノ議事及法律ニ依リ傍聽ヲ禁シタル公會ノ議事ハ詳略ニ拘ラヌ之ヲ出版スルコトヲ
得ス

第十六條 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト認ムル文書圖書ヲ出版シタルトキハ内
務大臣ニ於テ其發賣頒布ヲ禁シ其刻版及印本ヲ差押ユルコトヲ得

第十七條 外國ニ於テ印刷シタル文書圖書ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノト

認ムルトキハ内務大臣ハ其文書圖書ノ内國ニ於ケル發賣頒布ヲ禁シ其印本ヲ差押フルコトヲ得

第十八條 軍事ノ機密ニ關スル事項ヲ記載スル文書圖書ヲ出版スルコトヲ得ス

第十九條 重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項ハ公判ニ付セサル以前ニ於テ之ヲ出版スルコトヲ得ス

第二十條 刑律ニ觸レタル罪犯ヲ曲庇スルノ論說ヲ出版スルコトヲ得ス

刑事被告人又ハ刑事ニ觸レタル犯罪人ヲ救護シ又ハ賞恤スル爲ニスル文書ヲ出版スルコトヲ得ス

第二十一條 第三條ノ届出ヲ爲サスシテ文書圖書ヲ出版シタル者ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 發行者自己ノ氏名住所又ハ印刷人ノ氏名住所又ハ出版ノ年月日ヲ記載セサル文書圖書ヲ發行シタルトキハ二圓以上五十圓以下ノ罰金ニ處シ其之ヲ記載スルモ實ヲ以テセサルモノハ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ五圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第六條ヲ犯ス者罰前項ニ同シ

第二十三條 印刷者其氏名住所ヲ其印刷スル所ノ文書圖書ニ記載セス若ハ記載スト雖モ實ヲ以テセサルモノハ罰前條ニ同シ

第二十四條 政體ヲ變壞シ朝憲ヲ紊亂セントスルノ文書ヲ出版シタルトキハ著作者發行者

印刷者共犯ヲ以テ論シ二月以上二年以上ノ輕禁錮ニ處シ五十圓以上三百圓以下ノ罰金ヲ

附加ス

圖書ニシテ其目的前項ニ同シキモノハ罰前項ニ同シ

第二十五條 猥褻ノ文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作者發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上六月以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 文書圖書ヲ寫真トナシ因テ第十八條第二十四條第二十五條ヲ犯ス者ハ各本條ニ依テ處分ス

第二十七條 本條例ニ依リ出版ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ出版シタルトキハ著作者發行者共犯ヲ以テ論シ一月以上二年以下ノ輕禁錮又ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

其發賣頒布ヲ禁セラレタル文書圖書ヲ發賣頒布スルトキハ發行者又ハ發賣頒布者罰前項ニ同シ但其未タ發賣頒布セサル文書圖書ハ之ヲ沒收ス

第二十八條 第二十四條第二十五條第二十七條ノ場合ニ於テ刻版及印本ハ檢察官ニ於テ假リニ之ヲ差押フルコトヲ得差押フル所ノ刻版及印本ハ裁判ノ確定ヲ待テ無罪ナレハ本主ニ還付シ有罪ナレハ沒收ス

第二十九條 前條ノ差押ヲ爲ストキハ製本ノ体裁ニヨリ其差押フヘキ部分ト他ノ部分ト分

判シ得ルニ於テハ之ヲ分割スルコトアルヘシ

第三十條 他人ノ講義演説ヲ筆記若クハ編纂シ又ハ他人ノ著作ヲ編纂シタル文書圖書ヲ出版シ第二十四條第二十五條ヲ犯シタル場合ニ於テ講義者演説者若クハ著作人ニシテ其出版ヲ承諾シタルモノナルトキハ筆記者若クハ編纂ト同シク其罪ヲ論ス

第三十一條 文書圖書ヲ出版シ因テ誹毀ノ訴ヲ受ケタル場合ニ於テ其私行ニ涉ルモノヲ除ク外裁判所ニ於テ其人ヲ害スルノ惡意ニ出テス專ラ公益ヲ爲メニスルモノト認ムルトキハ被告人ニ事實ヲ證明スルコトヲ許スコトヲ得若シ其證明ノ確立ヲ得タルトキハ誹毀ノ罪ヲ免ス其損害賠償ノ訴ヲ受ケタルトキモ亦同シ

第三十二條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用サス

第三十三條 此條例ニ關スル公訴ノ期滿免除ハ二年トシ其犯罪ト認メラレタル文書圖書ヲ最後ニ發賣頒布シタル時ヨリ起算ス其發賣頒布セサルモノハ其最後ニ印刷シタル時ヨリ起算ス

第三十四條 文書圖書ヲ印刷スルトキハ直ニ發賣頒布セスト雖モ其目的發賣頒布ニ在ル者ニ總テ此條例ニ依ル

(一〇二)寫真版權條例(明治二十年十二月二十八日)

勅令第七十九號

第一條 凡ソ光線ト藥品トノ作用ニヨリ人物器物景色其他物衆ノ眞形ヲ寫シタルモノヲ寫真ト云ヒ寫真ヲ發行シテ其利益ヲ專有スル權ヲ寫真版權ト云フ

第二條 寫真版權ハ寫真師ニ屬シ寫真師死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス但他人ノ囑托ニ係ルモノ、寫真版權ハ囑托者ニ屬シ囑托者死亡後ニ在テハ其相續者ニ屬スルモノトス

囑托ニ係ル寫真ノ種版ニシテ現存スルモノハ版權所有者ニ於テ之ヲ寫真師ヨリ受取ルコトヲ得ルモノトス

第三條 寫真版權ノ保護ヲ受ケント欲スル者ハ發行前寫真一版ニ付キ見本二葉及六葉ノ定價ヲ添ヘ版權登録ヲ内務省ニ願出ヘシ但人物ノ寫真ハ登録ヲ待タズシテ其保護ヲ受クルモノトス

第四條 版權登録ノ寫真ニハ其保護年限間ハ版權所有者ノ氏名住所版權登録ノ年月ヲ記載スヘシ其記載セサル者ハ登録ノ効ヲ失フモノトス

第五條 内務省ニ於テハ寫真版權登録簿ヲ備ヘ置キ登録ノ願出アリタルトキハ之ヲ登録シ登録證書ヲ下付スヘシ

第六條 寫真版權保護ノ年限ハ登録ノ月ヨリ十年トス

第七條 寫真版權ハ制限ヲ付シ若クハ付セズシテ賣渡シ讓渡スコトヲ得

第八條 版權ノ保護ヲ寫眞ハ之ヲ覆寫シ若クハ機械又ハ舍密ノ作用ニヨリ多數ヲ複製シ得
ヘキ方法ヲ以テ寫眞術ト類似ノ模寫ヲ爲シ及寫眞師ニ於テ本人又ハ其相續者ノ承諾ヲ受
ケスシテ囑托ニ係ル寫眞ヲ囑製スルコトヲ得ス

第九條 第三條ノ手續ヲナサスシテ版權登錄ヲ詐稱シタル者ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金
ニ處ス

第十條 第八條ニ違フ者ハ版權條例ニ據リ僞版ヲ以テ論シ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ
處シ及損害賠償ノ責ニ任セシム

損害賠償ノ責ハ其原寫眞ノ版權年限終ルノ後一年ヲ以テ期滿得免ノ期トス

第十一條 此條例ニ關スル公訴ノ期限ハ一年トシ其犯罪ト認メラレタル寫眞又ハ模寫物作
爲ノ時ヨリ起算シ其發賣セルモノハ最後ニ發賣シタル時ヨリ起算ス

第十二條 此條例ヲ犯シタル者コハ刑法ノ自首減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヰス

(一〇三)人身賣買禁令(明治五年十月二日
第二百九十五號布告)

一 人身ヲ賣買致シ終身又ハ年期ヲ限リ其主人ノ存意ニ任セ虐使致シ候ハ人倫ニ背キ有マ
シキ事ニ付古來製禁ノ處從來年期奉公等種々ノ名目ヲ以テ奉公住爲致其實賣買同様ノ
所業ニ至リ以ノ外ノ事ニ付自今可爲嚴禁事

- 一 農工商ノ諸業習熟ノ爲メ弟子奉公爲致候儀ハ勝手ニ候得共年限滿七年ニ過ク可カテサ
ル事但雙方和談ヲ以テ更ニ期ヲ延ルハ勝手タルヘキ事
 - 一 平常ノ奉公人ハ一ケ年宛タルヘシ尤モ奉公取續候者ハ證文可相改事
 - 一 娼妓藝妓等年季奉公人一切解放可致右ニ付テノ貸借訴訟總テ不取上候事
- 右之通被定候條岐度可相守事

(一〇四)人身ヲ書入トシテ金錢ヲ貸借禁令(明治八年八月十四日
第二百二十八號布告)

金錢貸借ニ付引當物致候ハ賣買又ハ讓渡ニ可相成物件ニ限リ候ハ勿論ニ候處地方ニ寄リ間
ニハ人身ヲ書入致候者モ有之哉ノ趣右ハ嚴禁ニ候條此旨布告候事
但期限ヲ定メ工作使役等ノ勞力ヲ以テ負債ヲ償フハ此限ニアラス

(一〇五)人家稠密ノ場所ニ於テ參養禁止(明治六年五月十五日
第二百六十三號布告)

方今牛豚類ノ牧畜盛ニ行ハレ候處温暑ノ時ニ方テハ其臭氣人身ノ健康ヲ害スルノミナラス
近來獸類ノ傳染病流行往々人生ノ傷害ヲ醸シ候ニ付自今三府市街ノ區内ハ勿論各地一般人
家稠密ノ場所ニテ參養ノ儀堅ク禁止候條右區内ニ於テ從前營業ノ者ハ布令到達ノ日ヨリ三
十五日以内ヲ以テ郊外便宜ノ地ニ立退參養可致事

但東京府下朱引内ハ假令草野空間ノ地ト雖モ象養不相成候尤乳汁搾取ノヲ象養候ハ被
差許候得共不潔臭穢ノ儀モ有之候ハ詮議ノ上可令取拂事

〔七〕一〇六西洋形船規則(明治三年正月)

西洋形船買入ノ儀ニ付先般相觸置候趣モ有之軍艦ヲ除ノ外在來日本製造ノ船ハ勿論西洋形
船ニ至迄總テ民部省中通商司ノ管轄ニ被仰付候條得其意右西洋形船所持ノモノ或ハ新規買
求候モ「民部省」外務省連印ノ免許狀可申請尤別紙規則書一通開港場運上所ヨリ相渡令
所持候條其旨可相心得候一体日本製造ノ船ハ度々難破ノ患モ有之人命荷物等ノ損傷不少詰
リ皇國ノ御損失ト相成候ニ付追テハ不殘西洋形ノ大船ニ仕替度御旨趣ニ付當今西洋形ノ船
所持ノ者ハ厚御引立被遣候條其旨可相心得候乍去密商拔荷等不心得ノ儀相働候者ハ嚴重取
締不致候テハ不相濟ニ付別紙ノ通御規則御取極相成候儀ニ付津々浦々於テ此旨屹度可相守
候事

右之通御沙汰候事

午正月

免狀案

規則

西洋形船買入度者ハ其旨開港場運上所へ可願出其上船ノ善惡新古檢閲ノ上免許差遣可申事

一御國旗之事

右ハ決テ取外シ候事不相成附屬ノ解舟ニ至迄必可揚置事

一毎朝西洋時規第八字ニ引揚ケ夕方ハ日沒迄ヲ限引御スヘキ事

但右御國旗引揚無之節ハ海賊船ノ取扱請候テモ申譯ナキ事萬國普通ノ公法タル事

一御國旗ノ寸法別紙之通ニ候事

但大旗ハ祝日ニ引揚平日ハ小旗引揚ケ風雨晦暝ノ節ハ小旗迄引御置不苦候事

祝日

一御軍艦へ出合候節ハ我旗章ヲ三度昇降致禮義ヲナスヘキ事

一夜間ハ旗章ト引替ニ燈明可引揚燈明ハ青赤白ノ三坐ヲ設ケ航海中赤ハ左舷青ハ右舷ニ點

火シ白ハ前檣頂遠方ヨリ見留易キ所ニ揚置燈明消ヘサル様可致事

一船ノ込合タル節並風雨浪高ノ折ハ別テ心ヲ用ヒ互ニ突當ラザル様可致右ハ日本船タリ共

同様ナレモ外國船ハ別テ此規則嚴重ナレハ精密ニ用心スヘシ

一貿易港碇泊中荷物陸揚船積共運上所へ願立免許狀ヲ受出入可致事

但手數銀差出ニ不及候事

一貿易港於テ荷物ノ取引致シ候ハ其旨「通商司」へ可相屆事

一航海中ハ兼テ帳面用意致置開港場ハ不及申諸港へ入津ノ節ハ十二時西洋ノ二ノ間ニ其所ノ運上所又ハ港役所へ届出檢印可請出帆ノ節同斷ノ事

右檢印ノ式如左

何船
何月何日入港
又ハ
何港
運上所
役所

何船何港
出帆
何月何日
又ハ
何港
運上所
役所

右出入檢印請候節手數銀相納ルニ不及事

- 一西洋形船並在來日本商船トモ積荷ノ總數品物ノ名並其送リ先ヲ認「通商司」並運上所へ可差出尤其港ヨリ陸揚又ハ船積スヘキ品物ハ一々相届可申事
- 一諸港へ若船ノ節港役人船改ノタメ出張致引續キ爲取締乘組居候事
- 一但船中於テ聊ノ品タリ共任向ケ間敷儀一切不相成事
- 一船中乘組ノ者病死致候節ハ水葬不相成陸地へ相當ノ葬禮可取行事
- 一大砲小銃玉藥類ハ積込陸揚トモ其港運上所或ハ役所ノ免許ヲ乞フヘキ事
- 一海賊防禦其外ノ用意ノタメ相當ノ銃器備置候儀ハ苦シカラヌ尤兼而挺數等ノ免許狀「民部省」ヨリ請取置ヘキ事

一滯船入費ハ一噸ニ付一日金二朱ト被定置候間商賣向ハ勿論假令官府ノ御用タリ共船ノ進退自由ヲ得ス雜費相懸リ候節ハ其償右ノ噸數ヨリ割出シ取立候テ不苦候事

但諸港於テ威權ケ間敷振舞及ヒ無故出帆差留候節ハ右ノ償可申立事

一免許ナク外國へ通船ノ儀不相成候万一相犯スニ於テハ船並荷物共取上岐度御答可有之事
一免許ヲ受候上外國人ヲ雇ヒ船中使役ノ儀不苦事但不開港ノ地ニテ無據上陸爲致候節ハ護衛ノ者急度附添其所ノ役所へ相届官許ノ證據差出可申事

一困難ト見請候船ハ内外國人ノ差別ナク救助致シ可遣事 但外國人ハ開港場ノ役所へ可引渡尤右ニ付入費等有之節ハ開港場運上所ヨリ相當御下ケ金有之ヘキ事

一外國人へ貸遣候節ハ約定書ヲ以テ「通商司」へ届出候得ハ直ニ運上所へ掛合ノ上其國々旗章引揚候儀御差許可相成候事

一外國人ト申合近海於密商致シ候儀ハ勿論右ノ外御規則ニ相背候儀取計候節ハ其船取揚屹度御答可有之事

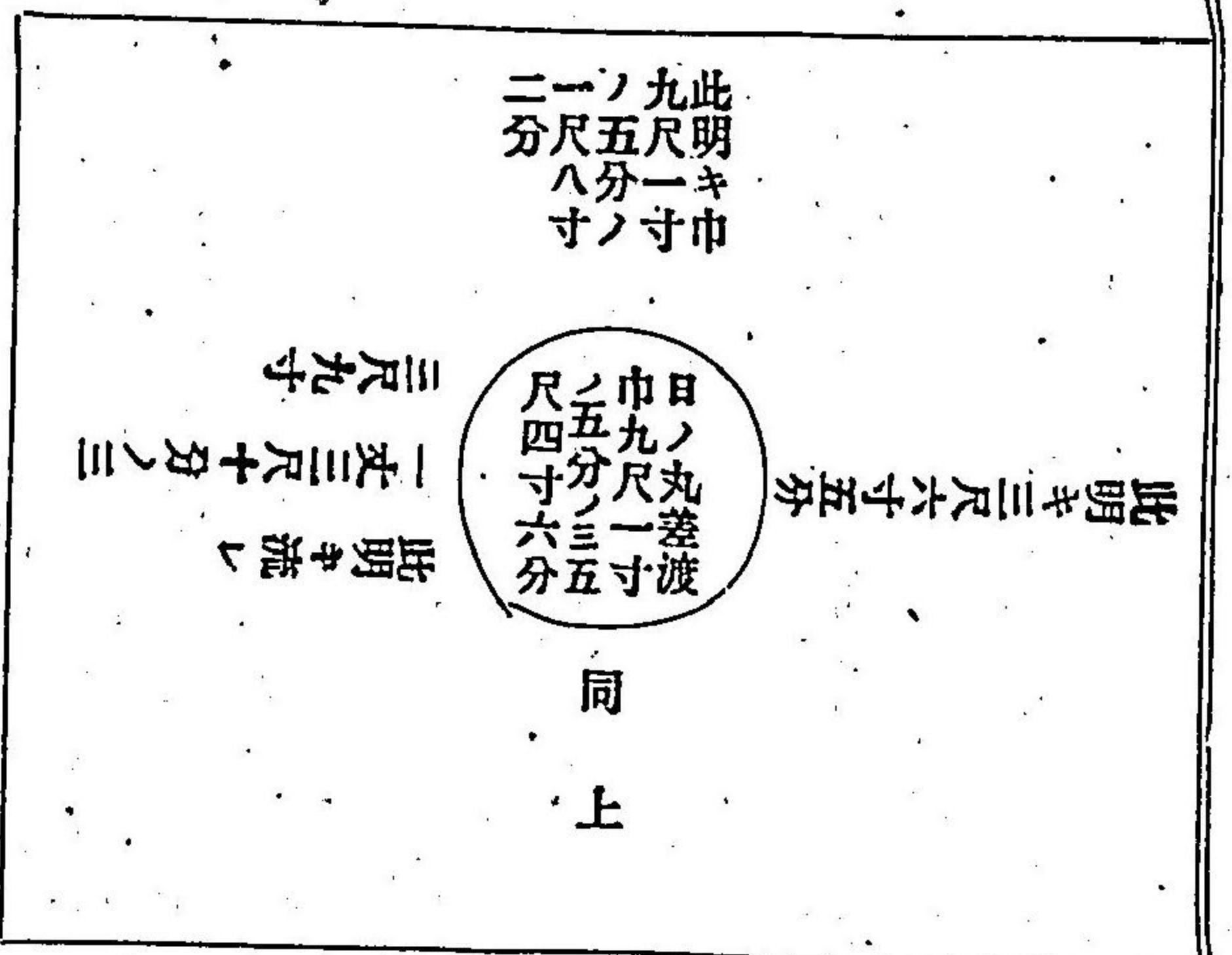
一商船ノ記號ハ別紙圖面ノ通製造致シ御國旗同様可取扱事
右之通相定候條嚴重ニ可相守事

明治二己年十二月

祝日可用分

大旗之圖

凡テ曲尺



七百九十四

平常可用分

中旗方法

流一丈

堅七尺

日ノ丸差渡四尺二寸

同先ノ明キ三尺

同乳ノ方明キ二尺八寸

風雨ノ節可用分

小旗寸法

流六尺

堅四尺二寸

日ノ丸差渡二尺五寸二分

同先ノ明キ一尺八寸

同乳ノ方明キ一尺六寸八分

(一〇七)西洋形日本船各開港場出入規則(明治八年十一月八日)

第一條 凡ソ西洋形日本船ハ蒸氣風帆ノ別ナク横濱神戸大坂長崎箱館新潟ノ六港ニ入津ス

ルキハ其投錨時刻ヨリ十二時間ニ第一號書式ノ通り其港税關へ届出ヘキ事

但シ風潮ノ不順等ニ因リ一時無餘儀入港シ十二時間ニ出港スルモノハ届書ヲ出スニ及

ハス
第二條 貨物ノ積卸ハ其港税關ノ免許ヲ受ケタル後チニアラサレハ一切相成ラサル事

第三條 輸入税未納ノ外國貨物及ビ貨主外國人ニテ輸出税未納ノ内國貨物廻漕ノ儀ハ本年

第二十號布告ニ照ラシ夫々手數致スヘキ事(第二十號布告ハ第十六章第一節ニ掲載ス参照スヘシ)

第四條 出港セントスルキハ必ラス二時前マテニ第二號書式ノ通り税關ニ届出ヘキ事
第五條 (明治九年三月十日第二十九號布告ヲ以テ左ノ通り改正ス)

出入港ノ届チ等閑ニスル者ハ左ノ通り科料申付クヘキ事

蒸氣船 三百噸マテ 金五圓

三百噸以上三百噸毎ニ金五圓ヲ加フ

風帆船 三百噸マテ 金三圓

三百噸以上三百噸毎ニ金三圓ヲ加フ

第六編 西洋形日本船各開港場出入規則

七百九十五

第一號

入港御届

一船名 蒸氣 風帆

船主

噸數

乘組

船客 日本人 外國人

仕出場所及月日

着港日

右御届申上候也

明治 年 月 日

某港税關

御中

船長或ハ會社

誰

印

七百九十六

第二號

出港御届

一船名 蒸氣 風帆

船主

噸數

乘組 日本人

船客 外國人

仕出場所

出港日

右御届申上候也

明治 年 月 日

某港税關

御中

船長或ハ會社

誰

印

七百九十七

(一〇八)西洋形船水先免狀規則(明治十一年十二月九日)

第一條 明治十二年一月一日ヨリ以後下ニ記載スル海港即チ水先區ニ於テ西洋形船舶ノ水

先人ト爲リ營業スル者及ヒ西洋形船舶ノ水先トシテ使用スル諸船ヘハ此規則ニ從テ發行
スル免狀ヲ交付スヘシ

第二條 水先ノ事業ニ關係シタル諸般ノ事務ハ農商務省(明治十四年九月十三日第四
號布告)ト改正ス故ニ今其ノ統轄ニ屬シ同省ニ於テハ充分其筋ニ明ナル者ヲ撰ミ
此規則ニ準據シテ各試験出願人ヲ試験スヘシ

第三條 免狀ハ左ニ記載ノ海港即チ水先區ニ於ケル水先區ニ交付シ且現況ニ從テ其他ノ地
方ニ於ケル水先人ニ交付スヘシ

第一 東京灣
即チ伊豆國石廊岬ヨリ同國神子本島及ヒ大島波浮港ヲ通過シテ安房國野島崎
ニ致ル一線ヲ以テ疆界線トス

第二 和泉灘
即チ紀伊國宮岬ヨリ淡路國潮崎ノ仁頃ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ北ハ淡
路國極北ノ部ニ於ケル東徑百三十五度ノ所ニ於テ畫シタル一線ヲ以テ疆界線

トス

第三 和泉灘ヨリ瀬戸内ヲ通過シテ長崎迄

第四 長崎港
即チ肥前國福田村ヨリ同國伊王島ノ極北ヲ通過シ同國沖島及ヒ香燒島ヲ經テ
同國深堀ニ至ル一線ヲ以テ疆界線トス

第五 津輕海峽
即チ陸奥國尻矢崎ヨリ渡島國惠山崎ニ至ル一線ヲ以テ其東界ヲ畫シ陸奥國太
間村ヨリ同國龍飛崎ニ至ル一線ヲ以テ其南界ヲ畫シ同國龍飛崎ヨリ渡島國白
神崎ニ至ル一線ヲ以テ其西界トス

第四條 各海港即チ水先區内ニ俱備スヘキ免許水先人ノ員數ハ其海港即チ水先區ノ現況ニ
從フヘシ

第五條 水先人ノ免狀ヲ出願スル者ハ自己ノ技業及ヒ性質殊ニ平素ノ行狀ニ係リ確實ナル
履歴證書ヲ豫テ其本貫又ハ寄留地ノ地方官廳ヲ經テ農商務省ヘ差出シ置キ或ハ試験開場
ノ時ニ於テハ直チニ司驗官ヘ差出スヘシ

第六條 水先人タル者ハ年齢二十二歳ニ滿テ少クモ一ケ年間ハ一百噸以上ノ西洋形船ニ於
テ船長若クハ一等運轉手ノ職ヲ執リシ者若クハ六ケ年間航海ニ從事シ其中十一ケ年或ハ

自今營業免許ヲ受ケントスル水先區内ニ於テ既ニ水先見習人ト爲リ航海ニ從事セルモノニ限ルヘシ但シ其水先區内ニ在ル諸港灣海峽及ヒ碇泊場ハ勿論危險ノ場所及ヒ之ヲ避ルヲメノ重立タル記標或ハ方位又ハ潮ノ満干潮流燈光浮標礁標ノ位置ニ悉皆通曉シ且大船ヲ指揮シテ之ヲ運轉スルニ充分適當セリト司驗官ヲ満足セシムルヲ要スヘシ

第七條 受驗人試驗ヲ受ケ正シク須要ノ條件ニ叶ヒタルト司驗官之ヲ認ムルキハ其旨ヲ農商務省ニ報告シテ直ニ免狀ヲ交付スヘシ但シ此免狀ハ翌年一月一日以後ハ全ク其効力ヲ有セサルモノトス

第八條 免狀ノ書替ヲ請願セントスル者ハ毎年十一月一日以前其願書ヲ農商務省ニ差出スヘシ但シ之ヲ許可シ或ハ許可セサルトハ都テ農商務省ノ意見ニ因ル可シ

第九條 免狀ヲ遺失スルモノ又ハ摩損スルモノハ其事由ヲ記シタル願書ヲ農商務省ニ差出シ書替新免狀ヲ申請クヘシ

第十條 水先人ハ始メテ其免狀ヲ願受ルキ金拾圓又其書替毎ニ金壹圓ノ手数料ヲ上納スヘシ

第十一條 水先人ノ試驗ヲ爲ストキハ定日ヨリ少クモ十四日前其旨ヲ和洋兩種ノ新聞紙ヲ以テ公告スヘシ此公告ニハ其免狀ヲ與フヘキ人數ノ限り及ヒ試驗ノ場所月日ヲモ記載スヘシ

第十二條 試驗出願人ノ履歷証書ヲ以テ充分満足ノモノト爲ルキハ出願ノ順次ヲ以テ其姓名ヲ登簿シ登簿ノ順次ニ從テ之カ試驗ヲ爲ス可シ

第十三條 此規則ニ從テ水先免狀ヲ受ケタル外國人ハ其執業上ニ限り日本帝國内何レノ海岸ト雖モ上陸シ且又其出發地ニ陸路歸ルヲ得ルノ特許ヲ與フヘシ

第十四條 第三條ニ規定セル水先區内ニ於テ無免許ノ水先人船舶ヲ嚮導スルキ免許水先人ヨリ其船舶ノ嚮導ヲ爲サント申入レ又ハ其爲メ信號ヲ爲スキハ何時ニテモ免許水先人ニ其職ヲ讓ルヘシ其職ヲ讓ルキ拒ミ仍ホ其船舶ヲ嚮導シ或ハ免許水先人ト詐稱シ正當ナラサル免狀ヲ用ウル者ハ五十圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

第十五條 水先料ハ別表ニ記ス金高ニ超過スヘカラス但シ表中記載セサルモノハ其距離ノ遠近ニ隨テ船長ト水先人ノ間ニ相當ノ約束ヲ以テ定ムヘシ

第十六條 二人以上ノ免許水先人同時ニ於テ船舶ノ嚮導ヲ申入レ又ハ其信號ヲ爲スキハ最初現ニ乗船シタル者其嚮導ヲ爲シ其水先料ヲ收領シ得ヘシ

第十七條 免許水先人水路嚮導専用ノ水先船ハ第十九條第一節第二節ニ示セル式ノ如ク之ヲ製シ其免狀ヲ農商務省ニ願出ツヘシ農商務省ハ檢査ノ上其免狀ヲ與フヘシ但シ此免狀ハ水先人免狀同様其効一ケ年ニ限ル者トシ年々其書替ヲ願出ツヘシ

第十八條 各免許水先船ハ免許ヲ得タル區域内ニ於テ其水路嚮導用ノ爲メニハ港灣稅噸稅

燈臺稅等ノ諸稅ヲ免スヘシ

第十九條 各水先船ハ左ノ徵候ヲ以テ區別スヘシ

第一 水先船ノ外部ハ總テ黑色タルヘシ

第二 船尾及ヒ大帆ノ上部ニ於テ國字及ヒ羅馬字ニテ免許水先船ノ文字并ニ其番號ヲ明瞭ニ書スヘシ

第三 免許水先船ニ免許水先人ノ乗込アルキハ桅上或ハ船首或ハ旗竿若クハ他ノ認メ易キ場所ニ於テ日出ヨリ日没マテ水先旗ヲ翻揚スヘシ但シ水先旗ハ明治十年一月甲

第一號海軍省布告ニ照準スヘシ

第四 水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事スルキハ他船ニ用ウル燈火ヲ掲ケス只橋頭

ニ於テ周回諸方ヨリ見フベキ白燈一個ヲ掲ケ且十五分時ヲ超エサル間歇ヲ以テ閃光一個又ハ數個ヲ發スヘシ水先船其營業場ニ於テ水路嚮導ニ從事セサルキハ他船ト同様ノ燈火ヲ掲クヘシ

第二十條 日中ニ於テ左ニ記載スル信號ヲ表スルキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ

第一 前橋ニ於テ其船ノ船首旗（英語）又ハ國旗ヲ掲揚スル事

第二 萬國普通ノ水先信號ノ符PT字ヲ揭示スル事

夜間ニ於テ左ノ信號ヲ同時若クハ別時ニ表示スルキハ水先ヲ要求スルノ信號ト認ムヘシ

明治十三年
第九號布告
ヲ以改正

第一 十五分時毎ニ青燈ヲ掲出スル事

第二 須臾ノ間歇ヲ以テ凡ソ一分時ノ間透明ナル白燈ヲ上甲板ノ舷部ニ於テ射發スル事

第二十一條 各免許水先人ハ其免狀ハ勿論此規則ノ寫ヲ一通ツ、交付スヘシ故ニ其筋ノ官吏又ハ雇主ヨリ其書類ノ閱覽ヲ要スルキハ直ニ之ヲ示スヘシ若シ之ヲ拒ムキハ農商務

省ニ於テ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ

第二十二條 此免狀ハ他人ニ貸與シ或ハ讓與スヘカラス若シ貸與シ或ハ讓與スルキハ農商務省ニ於テ其免狀ヲ取上クヘシ

第二十三條 農商務省ニ於テ免許水先人其本分ノ職務ニ堪ヘサルカ若クハ亂醉又ハ不行跡

アルカ或ハ故ナクシテ其職務ヲ執ルコトヲ嫌ヒ若クハ之レヲ怠リタルコトアリト思惟スルキハ同省ヨリ吏員ニ命シテ之レヲ審問セシメ其情狀ニ隨ヒ其執業ヲ停止シ或ハ其免狀ヲ取上クヘシ

(一〇九)西洋形商船海員雇入雇止規則(明治十二年二月廿九日)

第一條 西洋形商船(蒸氣船ハ拾噸以上風帆船ハ廿噸以上)ニ於テ海員ヲ雇入又ハ雇止ヲ爲

ス時ハ總テ此規則ノ條款ニ準據スヘシ

第二條 雇入ノ片ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省(本ト内務省ノ所明治十四年九月十三日第四十三號布告ヲ以テ改正ス故ニ今其改正布告

第六編 西洋形商船海員雇入雇止規則

ニ從ヒ農商務省トヨリ發スル海員雇入証書用紙ヲ以テ其定約書ヲ作り雇者被雇者記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受クヘシ

第三條 但シ定約書ハ正副二通ニ作り其本書ハ本船ニ保ナ置キ副書ハ浦役場ニ止メ置クヘシ
内海回漕船ニ於テハ雇入期限ヲ六ヶ月以内ト定ム然レモ外國航船ニ於テハ六ヶ月以外ヲ約スルヲ得ヘシ

第四條 雇止ノ時雇者ハ其地ニ於ケル浦役場ニ於テ農商務省ヨリ發スル海員雇止証書用紙ヲ以テ雇止證書ヲ作り記名調印ノ上浦役人ノ公認ヲ受ケ之ヲ其被雇者ニ付與スヘシ
雇人又ハ雇止ノトキ技術免狀ヲ所持スル者ハ浦役人ノ檢査ニ供シ且其檢査證書申受ヘシ
雇入又ハ雇止ノ公認ヲ受クルトキハ手數料トシテ被雇者給金一月分ノ百分一ニ當ル金額ヲ雇者被雇者ヨリ各其ノ半額ツ、浦役場ニ納ムヘシ
雇入定約書及ヒ雇止証書ヲ亡失毀損シ其寫ヲ乞フ者ハ貳名以上ノ保證人ト連署シ當初公認ヲ受ケタル浦役場ニ申出ヘシ浦役人ハ簿冊ニヨリ之ヲ製シ認印ヲ捺シテ交付スヘシ

第五條 雇止ハ雇入地ニ限り行フヘシ故ニ雇入地外ニ於テ滿期ニ至ルモ雇入地ニ販着スル迄ハ雇入期限内ト看做スヲ得ヘシ

第六條 但シ雇者被雇者双方ノ協意ヲ以テスル者ハ本條ノ限リニアラス

第六條 左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ハラヌ雇者ヨリ雇止ヲ爲スヲ得ヘシ

明治十六年五月十五日
加布告
明治十七年七月一日
行

一 疾病又ハ體質瘦弱ノ故ヲ以テ本務ヲ執行シ能ハサル者

一 本船難破其他ノ災厄ニ罹リ進航シ能ハサル時

一 但以上二項ノ場合ニ於テハ雇者ノ費用ヲ以テ雇入地ニ歸還セシムヘシ

一 第十條ニ掲クル違約一ヶ月内三回以上ニ至ル者

一 第十一條ヲ犯ス者

第七條 又左ノ場合ニ於テハ雇入地外ト雇入期限内トニ拘ハラヌ被雇者ヨリ其定約ヲ解クヲ得ヘシ

一 苛虐ノ取扱ヲ受ケシ時

一 飲食物又ハ給金ノ全額或ハ幾分ヲ給與セラレサル時

第八條 但シ右ノ場合ニ於テハ雇入地ニ歸着ノ旅費ヲ請求スルヲ得ヘシ

外國ニ於テ雇入若クハ雇止ヲ爲ストキハ其國駐留ノ我國領事館ニ於テ農商務省ヨリ發スル用紙ヲ以テ定約書若クハ雇止証書ヲ作り記名調印ノ上領事ノ公認ヲ受クヘシ

第九條 但シ定約書ハ正副二通ニ作り其本書ハ本船ニ保ナ置キ副書ハ領事館ニ止メ置クヘシ
新クニ海員トナル者及ヒ此規則施行以前雇止ト爲リシ者ヲ除クノ外被雇者ハ必ス
最後ノ雇止証書ヲ所持スヘシ又雇者ハ最後ノ雇止証書ヲ所持セサル者ヲ雇入ス可カラヌ

第十條 船長ノ指圖ヲ背ク者許可ヲ得スシテ上陸シ又ハ許可ノ時限ヲ過キテ販船スル者
(第十一條ノ脱船者ニアラズ)本務ヲ怠ル者喧嘩口論ヲ爲ス者酩酊スル者私ニ銃器刀鎗或
ハ酒類ヲ船中ニ貯フ者ハ毎回其給金三分ヨリ多カラサル額ヲ違約金トシテ雇主之ヲ收
メ且ツ其銃器刀鎗或ハ酒類ヲ取上クルヲ得ヘシ

第十一條 船中ニ於テ徒黨ヲ謀ル者船長ヲ劫ス者脱船スル者(雇入期限内ニ逃亡スル者ヲ
云フ)ニ其事情ニ因リ百日以内ノ懲役ニ處ス若シ船体船具ヲ毀損シ又ハ載貨ヲ私用スル
者ハ其實價ヲ償ハシムルノ外本條ニ依テ其罪ヲ科スヘシ

第十二條 海員ヲ虐使シ飲食物或ハ給金ノ全額又ハ幾分ヲ給與セサル者ハ其事情ニ因リ百
圓以内ノ罰金ヲ科シ其給與セサル金額ハ年六分ノ利子ヲ加ヘ償還セシムヘシ
第十三條 此規則中第十條第十一條第十二條ヲ除キ其他ノ諸條款ヲ犯ス者ハ其事情ニ因リ
五十圓以内ノ罰金ヲ科スヘシ

○明治十七年三月三十一日農商務省第九號達

客歲十二月第四十五號布告ヲ以テ明治十二年第九號布告西洋形船海員雇入雇止規則第四條
第三項追加相成候ニ就テハ右事務取扱手續左之通相定候條此旨相達候事

海員雇入雇止事務取扱手續

第一條 雇入ノ公認ヲ與フルニ際シ浦役人ハ左項ニ注意スヘシ

第一 船長、運轉機關手技術免狀ノ有無ヲ推問スル

第二 被雇者ニ於テ最後ノ雇止証書ヲ所持スルヤ否ヲ推問スル

第三 被雇者ヲシテ雇入定約ノ旨趣ヲ了解シタルヤ否ヲ推問スル

第二條 浦役人ハ船長、運轉手、機關手、技術免狀ヲ檢査シ真正ノモノト認ムルトキハ農商
務省ヨリ發行シタル技術免狀檢査証書ニ該免狀ノ種類及船名、定繫港名等ヲ記シ之ヲ交
付スヘシ

第三條 浦役人ハ被雇者ヨリ最後雇止証書ヲ出サシメ其証書裏面ヘ何年月日何港ニ於テ更
ニ何船ヘ雇入トナリタル旨ヲ記入シ且之ニ認印スヘシ但新ニ海員トナリ最後雇止証書所
持セサルモノハ此限ニアラス

第四條 被雇者中定約ノ旨趣ヲ了解セサルモノアレハ浦役人ニ於テ或ハ之ヲ讀聞セ或ハ解
釋シテ充分了解セシムヘシ

第五條 雇入ノトキハ勿論雇止ノトキト雖モ其證書ノ寫ヲ浦役場ニ保存スヘシ且雇入雇止
事務繁劇ノ場所ニ於テハ更ニ海員名簿ヲ備置キ雇者被雇者ノ住所、氏名、乘組船名等ヲ記
入シ他日ノ参照ニ供スヘシ

第六條 雇止ノ公認ヲ爲ストキハ前定約面ト相違ノ有無ヲ取糺シ若シ當初雇入ノ定約面ト
相違ノ廉有之トキハ船内日記簿其他ノ書類ニヨリ雇者ヨリ其事實ヲ證明セシメ海員名簿

ニ其旨ヲ記入シ而シテ之カ公認ヲ與フヘシ

第七條 甲地浦役場ニ於テ雇入ノ公認ヲ爲シタルモノヲ乙地浦役場ニ於テ雇止ノ公認ヲ爲シタル時ハ郵便其他便宜ノ方法ヲ以テ甲地浦役場へ遅クモ一ヶ月以内ニ之ヲ通報スヘシ此場合ニ於テハ甲乙兩浦役場ニ於テハ其雇入証書ノ寫若クハ海員名簿ニ其事由ヲ記入スヘシ

第八條 雇入雇止証書中被雇者年齢ハ必ス生年月日ヲ記セシムヘシ

第九條 雇入雇止証書中書損ノルトキハ必ス正誤セシメ浦役人之レニ認印スヘシ若シ書損甚シク字句不分明ナルトキハ更ラニ新調セシムヘシ

第十條 雇入期限内脱船又ハ死者アリシコト届出タル時ハ雇入証書中事故摘要ノ部へ其事故ヲ記載シ尙ホ其証書ノ寫若クハ海員名簿ニ之ヲ記入スヘシ

第十一條 雇入證書ハ假令ヒ餘白アリト雖モ再度之ヲ使用スルヲ許サス故ニ其餘白ハ總テ斜線ヲ畫スヘシ

第十二條 雇入期限内雇者被雇者ヨリ雇止ノ公認ヲ請フモノアル時ハ規則ニ照シテ其事由ヲ查明シ之カ公認ヲ與フヘシ但正副雇入証書及ヒ海員名簿ニ其事由ヲ記入スヘシ

第十三條 雇入期限内ニ雇者變更スト雖モ更ニ雇入定約ヲ爲サシムルニ及ハス然レモ此場合ニ於テハ滿期雇止ノトキ雇者變更ノ事由ヲ正副雇入証書若クハ海員名簿ニ記入スヘシ

(一一〇)西洋形船々長機關手免狀規則(明治十四年十二月廿八日)

此規則ハ海軍諸艦ニ關セサルモノトス

此規則中内國航船ト稱スルハ支那朝鮮ノ間ニ於ケル鴨綠江ヨリ露領黑龍江ニ至ルノ沿岸及ヒ薩噠噠諸港ニ航スルモノモ亦包含ス

第一條 船長運轉手機關手ノ職ヲ執ル者ハ此規則ニ遵ヒ其職ニ應スル等級ノ免狀ヲ農商務卿ヨリ受ケ之ヲ所持スヘシ

第二條 免狀ハ甲乙及ヒ小形船機關手ノ三種トナシ又甲乙ノ兩種トモ船長一等運轉手二等運轉手一等機關手二等機關手ノ五ニ分テ各試驗規程ニ從ヒ及第セシ者ニ授與スヘシ

第三條 試驗ノ規程ハ第一號布達ニ據ルヘシ

第四條 高等ノ免狀ハ下等ノ免狀ニ代用スルヲ得下等ノ免狀ハ高等ノ免狀ニ代用スルヲ得ス

甲種船長ノ免狀ハ乙種船長ノ免狀ニ對シ高等ノ効力ヲ有シ運轉手機關手ノ免狀ニ於ケルモ亦同シ

乙種二等運轉手ノ免狀ハ從前ノ小形船々長ノ免狀ニ對シ高等ノ効力ヲ有シ乙種二等機關手免狀ノ小形船機關手免狀ニ於ケルモ亦同シ

第五條 從前授與シタル本免狀ハ甲種免狀ト同一ノ効力ヲ有シ又假免狀ハ當分ノ内乙種免狀ニ代用スルヲ得

從前授與シタル小形船々長ノ免狀ハ其効力ヲ存シ又從前ノ小形船機關手ノ免狀ハ當分ノ内本則ノ小形船機關手免狀ニ代用スルヲ得

第六條 免狀ノ書換又ハ再授ヲ請フトキハ手數料金壹圓ヲ納ムヘシ但シ再授ヲ請フキハ二名以上ノ証人ヲ要ス

第七條 免狀ハ其筋吏員ノ指圖ニ應シ何時タリモ其檢査ヲ受クヘシ

第八條 甲種免狀試驗課程ニ合格スト認メタル外國政府ノ本免狀ヲ所持セル船長運轉機關手ハ更ニ試驗ヲ要セス原免狀同等ノ免狀ヲ授與スヘシ

第九條 左ノ三項ニ記載スル各船ハ其所有ノ區別及ヒ登簿噸數公稱馬力ノ限度ニ從ヒ應等若クハ高等ノ免狀ヲ受有スル職員ヲ乘組マシムヘシ

第一項

三百噸未滿

外國航船

甲種免狀船長

一名以上

三百噸以上

同

同 甲種免狀船長

同

一百馬力未滿

同 一等運轉手

同

第二項

一百馬力以上

同 二等機關手

同

三百噸未滿

內國航船

乙種免狀船長

同

三百噸以上

同 船長

同

五百噸以上

同 一等運轉手

同

二十馬力以上

同 二等運轉手

同

五十馬力未滿

乙種免狀二等機關手

同

一百馬力以上

同 甲種免狀一等機關手

同

第三項

二十噸(滿船ハ)拾噸以上

同

乙種免狀二等運轉手

同

二十馬力未滿

同 港内若ク
ハ湖川用

小形船機關手

同

但シ二十馬力以上ノモノハ第二項ニ準ヒ機關手ヲ乗組マシムヘシ

前記各項ニ從ヒ應等若クハ高等ノ免狀ヲ受有セス或ハ禁止、停止ニ係リ受有シ能ハスシテ其職ヲ執リ出航スル者及ビ之ヲシテ其職ヲ執ラシメ又ハ其職員ヲ減シテ出航セシムル者ハ各二圓以上二百五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

第十條 農商務卿ハ船長運轉手機關手ノ技術劣等ニシテ其職ヲ執ルニ不適當ナリト考察スルキ又ハ左ニ掲クル事項ニ於テハ其筋ノ吏員ヲシテ之ヲ審問セシメ其免狀ノ使用ヲ停止シ或ハ禁止スルコトアルヘシ

第一 亂醉、粗暴、其他ノ不品行若クハ指揮ニ悖戻シ又ハ職務ニ怠ル者

第二 失錯又ハ不當ノ所爲ニ由テ船ヲ失ヒ或ハ棄テ或ハ之ニ大損害ヲ生シ又ハ人命ヲ害ヒ或ハ大傷痕ヲ被ラシメシ者

第三 輕罪以上ノ刑ニ處セラレタル者

第十一條 前條審問中檢察官又ハ被害者ヨリ裁判所ニ出訴スルトキハ農商務卿其審問ヲ中止シ裁判確定ヲ竣テ之ヲ處分スヘシ

第十二條 免狀ノ使用ヲ停止シ或ハ禁止スルキハ農商務卿其免狀ヲ取揚シヘシ若シ之ヲ拒

ムモノハ貳圓以上二百五十圓以下ノ罰金ヲ科スヘシ

但シ第九條末ノ罪ト俱ニ發スルトキハ罰金ヲ並ヒ科スヘシ

第十三條 免狀使用ノ停止或ハ禁止ノ處分ニ服セサル者ハ其筋へ上訴スルコトヲ得ヘシ

第十四條 免狀ノ使用ヲ禁止シタル者ト雖モ一ケ年ノ後ニ至リ農商務卿ノ考察ヲ以テ更ニ相當ノ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

(一一一) 請願規則 (明治十五年十二月 第十二號 第五十八號)

第一條 人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願セントスル者ハ左ノ條規ニ依ルヘシ

第二條 郡區長及戶長職務内ノ事件ハ郡區長戶長ニ請願スヘシ郡區長戶長ノ指令ニ服セサル者ハ府知事縣令ニ請願シ府知事縣令ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ得

府知事縣令警視總監職務内ノ事件ハ府知事縣令警視總監ニ請願スヘシ府知事縣令警視總監ノ指令ニ服セサル者ハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ得

各省卿職務内ノ事件ハ其卿ニ請願スヘシ其指令ニ服セサル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ

得

第三條 凡ソ請願スル者ハ書面ヲ以テスヘシ口陳スルコトヲ許サス官署ノ求メニ應シテ開陳スルハ此限ニ在ラス

第四條 請願書ハ請願人自ラ署名捺印シ族籍住所ヲ記シ戸長ニ請願スル者ヲ除ク外住所戸長ノ與印ヲ受クヘシ其連名ヲ以テ請願スル者ハ各人自ラ署名捺印シ族籍住所ヲ記シ其總代又ハ請願發起人アルトキハ其由ヲ寫書スヘシ戸長ノ與印ヲ受ルハ前ノ例ニ同シ

第五條 府縣郡區總代又ハ結社總代ノ名ヲ以テ請願スルコトヲ得ス但成法ニ制定セラレタル會社ハ此限ニ在ラス

第六條 請願書ヲ上呈スルニハ代人ヲ以テスルヲ許サス數人連名スル者ハ請願人中ニ於テ三名以下ノ總代人ヲ撰ヒ之ニ委托スヘシ

第七條 請願書ハ郵便ヲ以テ上呈スルコトヲ得

第八條 上司ニ呈スル請願書ニハ其經歷スル所ノ官署ノ指令書ヲ添フヘシ

第九條 請願書ノ郵達ヲ得タル各省若シ其主務ニ非サルトキハ直チニ之ヲ主務省ニ移シ其由ヲ請願人ニ通知スヘシ

第十條 太政官ニ於テ請願ヲ裁可スルハ主務省ニ付シ處分セシムヘシ

第十一條 太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ更ニ請願スルコトヲ得ス又裁判所ニ訴フルコトヲ得

ス

第十二條 請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ス

第十三條 凡ソ事ノ建白ニ屬スヘキ者ハ人民各自ノ利害ニ係ルヲ以テ請願スト雖モ受理セ

ス

第十四條 行政處分ノ既ニ五年ヲ經タル者ハ請願ヲ受理セス

第十五條 請願人第二條ノ順序ヲ經ス及第三條第四條第五條第六條第八條第十一條ノ規程ニ循ハサル者ハ受理セス

第十六條 請願書ニ侮辱誹毀ノ語ヲ用ヒ及第二條ニ示ス所ノ官署ノ外ニ向ヒ請願スル者ハ受理セス

第十七條 條規ニ違ヒ受理セラレサルノ請願ヲ以テ強テ受理ヲ請フ者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス其連名請願スル者ハ情ヲ知ラサル者ヲ除ク外各人均ク罪ヲ論ス其發起人ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス若シ請願人ノ外教唆者アルトキハ發起人ト同ク罪ヲ論ス

其嘯聚ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ涉ル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其侮辱ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

其嘯聚ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ涉ル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其侮辱ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

其嘯聚ニ涉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十九條 請願書ハ新聞紙其他ノ文書ヲ以テ公行スルコトヲ許サズ
犯ス者ハ罪前條第一項ニ同シ

第二十條 請願ニ由リ人ヲ誣告スル者ハ刑法ニ依テ處分ス

明治二十年九月廿九日內務省令第二號

凡ソ意見ヲ建言シ又ハ各自ノ利害ニ關シ請願スル者ハ明治十三年第五十三號布告及十五年第五十八號布告ニ依遵スヘキ處近來建言ヲ名トシ官吏ニ面謁口陳ヲ求メ從テ杭論喧擾ニ涉ル者アリ右等ハ何等ノ名義ヲ用ユルニ拘ラズ其違犯者ハ總テ十五年第五十八號布告ニ依リ處分スヘシ

○明治十六年一月十七日內務省甲第二號告示

明治十五年(十二月)第五十八號布告ニ據リ請願スル書面ハ美濃紙ヲ用ヒ正副貳通宛指出スヘキモノトス但シ其書面ヲ却下スル場合ト雖モ副書ハ留置クコアルベシ此旨告示候事

(一一一)石油取締規則(明治十六年二月十日)

第一條 石油ヲ分テ二種トシ閉塞發焰試驗ヲ用ヒ攝氏驗温器三十度(華氏八十六度)以上ノ温度ニ達セサレハ發焰セサルモノヲ第一種トシ三十度ニ達セズシテ發焰スルモノヲ第二種トス

第二條 點燈用ニ供スルハ第一種ノ石油ニ限リ第二種ノ石油ハ醫療製藥調劑用及ヒ物理學化學工藝上ニ於テ業用ニ供スルノ外之ヲ用フルヲ許サズ

第三條 石油營業者ヲ分テ擴業者精製者問屋及小賣商ノ四類トス其營業者ハ都テ管轄廳(東京府下ハ警視廳)ノ許可ヲ受クヘシ但二類以上兼業スル者ハ別ニ其許可ヲ受クヘシ

第四條 石油ノ種類ハ內務卿ノ必要トスル地方ニ於テ檢査員ヲシテ之ヲ檢査セシムベシ石油ハ檢査済ノ証アルモノニアラサレハ之ヲ販賣スルヲ許サズ但擴業者ヨリ精製者ニ販賣スルハ此限ニアラス

第五條 檢査済ノ石油ヲ家屋内ニ貯藏スルヲ得ルハ第一種ノ石油五石以内第二種ノ石油五斗以内トシ容器ハ漏出ノ虞ナキ不燃質物ニ限ルベシ

第六條 石油營業者前條制限外ノ石油并ニ檢査未済ノ石油ヲ貯藏スル場所建物及ヒ精製所ノ構造方ハ都テ管轄廳(東京府下ハ警視廳)ノ認可ヲ受クベシ

第七條 第二種ノ石油ハ精製者問屋ヨリ直ニ需用者ニ販賣シ小賣商ハ第一種ノ石油ニ限リ販賣スルヲ得ルモノトス

第八條 第二種ノ石油ヲ販賣スル者ハ購買者ヨリ其數量及ヒ需用ノ趣意年月日住所氏名ヲ詳記シタル書付ヲ取り置キ一年間存保スベシ但販賣時限ハ日出ヨリ日没マテトス

第九條 石油ヲ運搬スル者ハ其石油タルヲ表記スヘシ但其積卸ニ必要ナル時間ノ外物揚

場又ハ路傍ニ置クヘカラス

第十條 此規則ヲ犯シタル者ハ二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

(一一三)清國及ヒ朝鮮國在留日本人取締規則(明治十六年三月十日)

(第九號布告)

第一條 清國及ヒ朝鮮國駐劄ノ領事ハ在留ノ日本人該地方ノ安寧ヲ妨害セントシ「若クハ風俗ヲ壞亂セント」スル者又ハ其行爲ニ因リ該地方ノ安寧ヲ妨害シ「若クハ風俗ヲ壞亂」スルニ至ルヘキ者ト認定スルキハ一年以上三年以下在留スルヲ禁止スヘシ但其情狀ニ由リテハ其期限間相當ノ保證金ヲ出サシメ在留セシムルコトヲ得

第二條 在留ヲ禁止セラレタル者ハ十五日以内ニ退去スヘシ若シ期限内退去シ難キ正當ノ事由アリテ其旨ヲ申立テルキハ領事ハ相當ノ猶豫期限ヲ與フルコトヲ得

第三條 保證金ヲ出シタル者再ヒ第一條ノ舉動アリト認定スルキハ領事ハ其保證金ヲ沒收シ仍ホ在留ヲ禁止スヘシ

第四條 退去期限若クハ猶豫期限内ニ退去セサル者及ヒ禁止期限ヲ犯シタル者ハ十一日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上百圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第五條 此規則ノ處分ニ對シテハ上訴ヲ許サス

(一一四)船稅規則(明治十六年四月十日)

(第七日第十三號布告)

第一章 鑑札 稅率 免稅

第一條 凡ソ船舶ハ此規則ニ依リ課稅スル者トス

第二條 船舶所有主ハ其船舶定繫場ヲ定メ定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ヲ乞フヘシ

第三條 新規造船シタル者其造船場所在ノ府縣管内ニ定繫場ヲ定メサルキハ該廳ニ願出檢査ヲ受ケ假鑑札ヲ乞ヒ定繫場ニ回漕ノ上其地方廳ニ願出本鑑札ト引換ヲ乞フヘシ

第四條 船体ヲ變更シ積量若クハ間數ニ増減ヲ生スルキハ其定繫場所在ノ地方廳ニ願出檢査ヲ受ケ鑑札ノ引換ヲ乞フヘシ

第五條 船舶ヲ賣買讓與シタル者ハ双方連署ノ上買受讓受主ノ定ムル定繫場所在ノ地方廳ニ願出鑑札ノ引換ヲ乞フヘシ

第六條 船舶ノ稅率ハ左ノ如シ

西洋形蒸氣船

百噸ニ付一年金拾五圓

同 風帆船

同 同 金拾圓

日本形船積石五十石以上

百石ニ付同 金貳圓

第六編 清國及ヒ朝鮮國在留日本人取締規則 船稅規則

同 積石五十石未滿
解漁船小廻船積石ニ拘ラス

自軸梁
至艦梁

三間間迄ハ一年金三拾錢

但三間以上壹間ヲ加フル毎ニ金拾五錢ヲ增加ス

遊船

自軸梁
至艦梁

三間迄ハ一年金五拾錢

但三間以上壹間ヲ加フル毎ニ金貳拾五錢ヲ增加ス

第七條 本鑑札又ハ假鑑札ハ航行若クハ回漕ノ時之ヲ本船ニ所持スヘシ

但日本形積石五十石未滿ノ船并解漁船小廻船遊船ノ本鑑札ハ其船ニ釘付スヘシ

第八條 解船破船又ハ水火盜難等ニ因リ船舶ヲ失ヒタル者ハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ届出鑑札ヲ還納スヘシ

第九條 鑑札ヲ亡失毀損シタル時或ハ改名代替ノ時或ハ船號ヲ改メ若クハ定繫場ヲ變換シタルハ其旨定繫場所在ノ地方廳ニ届出鑑札ノ再渡若クハ引換ヲ乞フヘシ

第十條 左ニ掲クル船舶ハ其稅ヲ免除ス其所有主ハ地方廳ニ届出免稅ノ烙印ヲ乞フヘシ

倉庫船 水田ノ耕作ニ用ル船 水災ノ爲メ陸地ニ備ヘ置ク船 橋梁ニ換ヘ渡場ノミニ用ル船
船橋ノ組成ニ用ル船

航海中本船ニ揚ケ置ク傳馬船「ハツター」ノ類

第二章 納稅

第十一條 稅金ハ一年ヲ二期ニ別チ一月一日七月一日現在ノ船舶ヨリ徵收スル者トス其前半年分ハ一月三十一日限リ後半年分ハ七月三十一日限リ定繫場所在ノ地方廳ニ上納スヘシ

第十二條 新規造船シタル者ハ鑑札ヲ受クル時該期ニ係ル稅金ヲ上納スヘシ

第十三條 船體ヲ交更シ積量若クハ間數ニ増減ヲ生シタルキハ次期ヨリ其積量又ハ間數ニ隨ヒ稅金ヲ納ムヘシ

第十四條 他管下ニ定繫場ヲ定ムル者ハ該地ニ代人ヲ定メ連署ノ上其定繫場所在ノ地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十五條 本籍管内ニ定繫場ヲ定メタル者不在ノキハ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十六條 假鑑札ヲ受ケタル船舶定繫場ニ回漕中納稅期限ニ係ルキハ豫メ定繫場所在ノ地ニ代人ヲ定メ其地方廳ニ届出納稅ヲ辨セシムヘシ

第十七條 此規則ヲ犯シ脫稅ニ係ル者ハ處罰ノ後其稅金ヲ追徵ス

第三章 罰則

第十八條 此規則ヲ犯シ脱税ニ係ル者ハ其脱税高五倍ノ科料若クハ罰金ニ處ス

第十九條 免稅船ヲ有船稅ノ用ニ充テタル者ハ貳圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 第三條第五條第七條第九條第十四條第十五條第十六條ヲ犯シタル者及ヒ第十條ノ免稅船ニ烙印ヲ受ケサル者ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十一條 此規則ニ依リ罰金若クハ科料ニ處スル者ハ刑法ノ不諭罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス但シ刑法第七十五條第七十六條ノ場合ハ此限ニ在ラス

○明治十六年六月六日大藏省第三十九號達

本年(四月)第十三號ヲ以テ船稅規則制定布告相成候ニ付右取扱心得書別紙ノ通相定ム

但明治四年十二月二十六日達噸石數改方法則ノ外船稅規則ニ關スル從前ノ達ハ廢止ス

船稅取扱心得書

第一條 西洋形(蒸氣風帆)船并ニ日本形積石五拾石以上ノ船艦札ハ第一號雛形ノ通日本形積石五拾石未滿ノ船并ニ解漁船小廻船遊船ノ艦札ハ第二號雛形ノ通府縣廳ニ於テ調製下付スヘシ(但假艦札ハ雛形艦札ノ上ヘ假ノ字ヲ記入スヘシ)

第二條 噸數ハ一噸積石數ハ一石間數ハ一間ニ止メ其以下端數ハ切捨ツヘシ

第三條 規則第七條但書艦札釘付ノ箇所及ヒ同第十條免稅烙印記ノ箇所ハ該船舶ノ舳外部測面ニ之ヲ爲スヘシ(但烙印ハ從前雛形ノ如ク府縣廳ニ於テ調製スヘシ)

第四條 規則第三條ニ據リ檢査ヲ爲シ假艦札ヲ付與シタル者ハ其旨定繫場所在ノ管廳ニ通知スヘシ其通知ヲ受ケタル管廳ハ直ニ其地ノ船籍ニ編入シテ該期ノ税金ヲ收入シ退テ本艦札引換相渡シタル上最前通知ノ管廳ニ報道スヘシ

第五條 船舶賣買讓與其他ニテ定繫場ヲ變換シ其新舊定繫場甲乙兩管廳ニ交渉スル者ハ乙管廳ニ於テ其他ノ船籍ニ編入艦札引換相渡シタル上ハ直ニ甲管廳ニ報道スヘシ

第六條 前二條ノ手續ニ依リ艦札引換ノ節ハ更ニ該船ノ檢査ヲ要セズ舊艦札若クハ假艦札ニ記載ノ噸石數又ハ間數等ニ據ルヘシ(但其返納セシ舊艦札假艦札ハ不取締無之様消却シ最初下付シタル管廳ヘ返戻ニ及ハス)

第七條 新形ノ船舶ハ内部ノ結構又ハ外部ノ裝飾等ヲ問ハス該船骨體ノ構造ヲ以テ日本形ト西洋形トノ區分ヲ爲スヘシ

第八條 西洋形蒸氣風帆船ハ港灣湖川等ヲ運用スル小船ト雖モ總テ其噸數ニ依リ解漁船小廻船ハ積石數五十石以上ト雖モ總テ其間數ニ依リ課稅スルモノトス

第九條 港灣其他ノ海岸又ハ湖川等ニ碇泊又ハ繫キ置ク船舶ハ主任官隨時之ヲ檢査スヘシ

第十條 船稅表及ヒ免稅船員數表ハ第三號第四號雛形ニ倣ヒ每半年分ツ、調製翌期(一七)月三十一日限リ該地差立租稅局ヘ送付スヘシ(以下ハ略ス)

(一一五)西洋形船舶検査規則(明治十七年十二月二十二日第三十號 布告同十八年十月一日ヨリ施行ス)

- 第一條 西洋形船舶海軍艦船ヲ除クハ此規則ニ遵ヒ検査ヲ受クヘシ但登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル風帆船ハ此限ニアラス
- 第二條 船舶検査所設置ノ場所ハ農商務卿之ヲ定ム
- 第三條 検査所所在ノ地方ヲ航行スル船舶ノ検査ハ其最寄検査所ニ願出ヘシ
- 第四條 検査所未設ノ地方ヲ航行スル船舶ノ検査ハ其船籍アル地方廳ヲ經テ農商務省ニ願出ヘシ
- 第五條 登簿船免狀ヲ受有スルニ及ハサル汽船ノ検査ハ其船籍アル地方廳ニ願出ヘシ
- 第六條 検査官吏ハ農商務卿之ヲ命ス但第五條ノ汽船ニ係ル検査官吏ヘ府知事縣令之ヲ命ス
- 第七條 検査官吏ニ於テ船舶ヲ検査シ航行ニ適當ト認ムルトキハ農商務省ヨリ左ノ事項ヲ記載シタル検査證書ヲ交付ス但地方廳ノ検査ニ係ル者ハ其廳ヨリ之ヲ交付ス
 - 一 番號
 - 一 船名
 - 一 船主氏名
 - 一 定發場名

- 一 登簿噸數
 - 一 端船其他必要ノ所屬品
 - 一 航行シ得ヘキ場所ノ定限
 - 一 證書有効期限
- 汽船ニハ左ノ事項ヲ加フ
- 一 公稱馬力
 - 一 汽機ノ種類
 - 一 汽罐ノ種類
 - 一 最大汽壓
 - 一 旅客定員
- 第八條 検査官吏ニ於テ船舶ヲ検査シ航行ニ不適當ト認ムルトキハ其修理ヲ命シ或ハ出帆ヲ差止ムヘシ
- 第九條 検査證書ノ効力ハ其船ノ現狀ニ依リ六箇月十二箇月ニ區別ス
- 第十條 検査證書ハ船内最モ見易キ場所ヘ掲ケ置クヘシ
- 第十一條 検査證書ヲ亡失若クハ毀損シタルトキハ其理由ヲ詳記シ再度ヲ願出ヘシ
- 第十二條 船名船主及ヒ定發場ヲ變更シタルトキハ農商務省又ハ地方廳ニ届出ヘシ

第十三條 船体若クハ汽機汽罐其他要部ノ修理若クハ變更ヲナシタルトキハ更ニ検査ヲ受クヘシ

第十四條 船舶航行ノ用ヲ爲サ、ルニ至リタルトキ又ハ除籍トナリタルトキハ直ニ検査證書ヲ農商務省又地方ハ廳ニ返納スヘシ

第十五條 検査證書ノ有効期限内ト雖モ検査官吏ニ於テ必要ト認ムル場合ニ於テハ臨檢スルコトアルヘシ

第十六條 船舶ノ検査ヲ受ケスシテ航行シ又ハ無効ノ検査證書ヲ使用シ又ハ検査證書ニ記載セル最大汽壓ヲ超過シ或ハ場所ノ定限ヲ越エテ航行シ又ハ検査官吏ノ命ニ違背シ修理セスシテ出帆シ若クハ差止ノ命ニ違背シテ出帆シタル者ハ三十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十七條 検査證書ニ記載セル端船其他必要ノ所屬品ヲ具ヘス又ハ旅客定員ヲ超過シテ航行シ又ハ第十三條ヲ犯シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 検査官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ第十條ヲ犯シタル者ハ二十圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 前三條ノ場合ニ於テ正當ノ事由アルモノハ其罪ヲ論セス

第二十條 第十一條第十二條第十四條ヲ犯シタル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ

處ス

第二十一條 検査細則及ヒ施行ノ手續ハ農商務卿之ヲ定ム

○明治十二年二月五日第五號布告

自今西洋形船ハ總テ沿海府縣ノ所轄ニ被附候條來ル七月三十一日迄ニ本船ノ定繫場ヲ定メ其地ノ船籍ニ編入致スヘシ但定繫港ハ船主又ハ本船ノ公務ヲ代理スル者所在ノ地ニ於テ定ムヘシ

(一一六)專賣特許條例(明治十八年四月十八日第七號布告)

明治十八年七月一日ヨリ施行

第一條 有益ノ事物ヲ發明シテ之ヲ專賣セント欲スル者ハ農商務卿ニ願出其特許ヲ受クヘシ

農商務卿ハ其專賣ヲ特許スヘキモノト認ムルキハ專賣特許證ヲ下付スヘシ

第二條 專賣特許ヲ願出ルニハ其願書ニ發明ノ明細書并必要ノ圖面ヲ添フヘシ但時宜ニ依リ其現品又ハ雛形ヲ差出サシムルコトアルヘシ

第三條 專賣特許ノ年限ハ專賣特許證ノ日附ヨリ起算シ十五年ヲ超ユルコトヲ得ス

第四條 左ノ諸項ニ觸ル、モノハ專賣特許ヲ願出ルコトヲ得ス
一 他人ノ既ニ發明シタルモノ

專賣特許條例

- 但他人ヨリ讓受ケタルモノハ此限ニアラス
- 二 專賣特許願出以前公ニ用ヒラレ又ハ公ニ知ラレタルモノ
- 三 治安、風俗、健康ヲ害スヘキモノ
- 四 醫藥

第五條 軍用ニ必用ナリト認メ又ハ廣ク用ヒシムルコトヲ必要ナリト認ムル發明ニハ農商務卿ニ於テ專賣特許ヲ與ヘス又ハ既ニ與ヘタルモノト雖モ之ヲ取消スコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テハ農商務卿ニ於テ相當ト認ムル報酬金ヲ其發明者ニ下附スヘシ

第六條 專賣特許ヲ願出ルノ權及專賣ノ權ハ相續者ニ傳ハルヘキモノトス

相續者ニ於テ專賣ノ權ヲ相續シタルトキハ三ヶ月以内ニ農商務省ニ届出ヘシ

第七條 專賣ノ權ヲ他人ニ讓與又ハ分與セントスルトキハ農商務卿ニ願出ヘシ

第八條 專賣人其發明ヲ改良シタルトキハ追加專賣特許ヲ願出ルコトヲ得但追加特許ハ原

專賣特許ノ年限ヲ超ユルコトヲ得ス

第九條 專賣人ノ發明ヲ改良シテ專賣特許ヲ得ント欲スル者ハ專賣人ノ承諾ヲ經ヘシ

專賣人其承諾ヲ拒ミ農商務卿ニ於テ改良ニ妨アリト認ムルトキハ其發明ヲ改良ノ部分ト

合セテ使用スルノ特許ヲ改良者ニ與フルコトアルヘシ

前項ノ場合ニ於テハ農商務卿ニ於テ相當ト認ムル報酬金ヲ改良者ヨリ專賣人ニ與ヘシム

ヘシ

第十條 專賣人ハ其發明品ニ專賣特許證ノ年月日及年限ヲ標記スヘシ品柄ニ由リ標記スルコトヲ得サルモノハ其上包等ニ標記スヘシ

第十一條 專賣人ノ名簿及發明ノ明細書圖面等ハ農商務省ニ於テ衆庶ノ觀覽ニ供スヘシ

第十二條 專賣人轉籍轉居又ハ氏名ヲ變換シタルトキハ三ヶ月以内ニ農商務省ニ届出ヘシ

第十三條 專賣特許證ヲ毀損遺失シタルトキハ其再度ヲ農商務卿ニ願出ヘシ

第十四條 左ノ場合ニ於テハ專賣特許無効ニ歸シ其特許證ヲ返納セシムヘシ

一 第四條ノ諸項ニ觸レタルコトヲ發見シタルトキ

二 願書并明細書圖面等ニ相違ノ事實アルコトヲ發見シタルトキ

第十五條 左ノ場合ニ於テハ專賣ノ權ヲ失フ

一 專賣特許證ノ日附ヨリ二年ヲ經テ其發明ヲ實施公行セス又ハ事故ヲ届出スシテ二年

間之ヲ中止シタルトキ

二 專賣特許ノ發明品ヲ外國ヨリ輸入シテ之ヲ販賣シタルトキ

第十六條 專賣特許證ヲ下付シタルトキ及專賣特許無効ニ歸シタルトキ又ハ專賣ノ權ヲ失

ヒタル者アルトキハ農商務省ヨリ之ヲ廣告スヘシ

第十七條 「專賣特許」ニ係ル願書ニハ左ノ區別ニ從ヒ證券印紙ヲ貼用スヘシ

- 一 專賣特許追加特許
 - 二 專賣權ノ讓與分與
 - 三 專賣特許證ノ再渡
- 專賣特許證ヲ受クル者ハ左ノ區別ニ從ヒ專賣特許料ヲ納ムヘシ
- 一 五年ノ專賣特許 金拾圓
 - 二 十年ノ專賣特許 金拾五圓
 - 三 十五年ノ專賣特許 金貳拾圓
- 第十八條 專賣特許ノ事務ニ關スル官吏ハ專賣特許ヲ願出ルコトヲ得ス
- 第十九條 專賣人其專賣權ヲ侵サレタルキハ之ヲ告訴シ并要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得但第十條ノ標記ヲ爲サ、ルトキハ要償ノ訴ヲ爲スコトヲ得ス
- 第二十條 專賣特許ノ發明品ヲ偽造シ若クハ外國ヨリ輸入シ又ハ專賣特許ノ方法ヲ竊用シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二十一條 專賣特許ノ機械又ハ方法ヲ以テ製造シタル物品ト同一種類ノ物品ニ專賣人ノ記號ニ紛フハシキ記號ヲ用ヒタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二十二條 第二十條第二十一條ノ犯罪ニ係ル物品ヲ情ヲ知テ販賣シタル者ハ四圓以上四十圓以下ノ罰金ニ處ス

- 十圓以下ノ罰金ニ處ス
- 第二十三條 第二十條第二十一條第二十二條ノ場合ニ於テハ其物品及犯罪ノ用ニ供シタル物件ヲ沒収シテ專賣人ニ給付シ其既ニ賣捌キタルモノハ代價ヲ追徴シテ之ヲ給付ス
- 第二十四條 詐偽ノ所爲ヲ以テ專賣特許ヲ受ケ又ハ專賣特許ヲ偽稱シタル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス
- 第二十五條 第六條第二項第十二條ノ届出ヲ其期限内ニ爲サ、ル者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ料料ニ處ス
- 第二十六條 此條例ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス
- 第二十七條 第二十條第二十一條第二十二條ノ犯罪ハ專賣人ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス
- 第二十八條 專賣人告訴ヲ爲シタルトキハ裁判官ニ於テ假ニ其告訴ニ係ル物品ノ發賣ヲ停止スルコトヲ得
- 附則
- 明治四年四月七日專賣略規則布告以後本條例布告以前ニ發明シ明治五年三月第三百五號布告但書ニ依リ届出タル事物ニシテ之ヲ專賣セント欲スル者ハ公ニ用ヒラレ公ニ知ラレタルモノト雖モ本條例施行ノ日ヨリ六ヶ月間ニ其專賣特許ヲ農商務卿ニ願出ルコトヲ得
- 本條例布告以前既ニ前項ノ發明ヲ使用シタル者ハ本條例施行ノ日ヨリ一ヶ年間ニ其使用特

許テ農商務卿ニ願出ルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本條例第十七條專賣特許ノ免許料ト同一金額ヲ納ムヘシ

專賣特許手續(明治十八年四月十八日)

第一條 專賣特許ニ關スル願書及届書ハ總テ地方廳ヲ經テ農商務省ニ差出スヘシ

第二條 專賣特許ヲ願出ルトキハ壹個ノ發明ニ付願書明細書并圖面各一通ヲ差出スヘシ

二人以上協同シテ一個ノ發明ヲ爲シタルトキハ其願書及明細書等ニ連署スヘシ

第三條 明細書及圖面ハ願人ヨリ封緘シテ之ヲ差出シ地方廳ハ封緘ノ儘之ヲ農商務省ニ進達スヘシ

第四條 專賣特許願書ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ

- 一 發明ノ名稱
- 二 專賣特許ノ年限
- 三 條例ニ牴觸セサル旨
- 四 願書明細書等ニ相違ノ事實ナキ旨
- 第五條 明細書ニハ左ノ諸件ニ記載スヘシ
 - 一 發明ノ目的及性質ノ大體説明

明治二十五年五月二十日
農商務省令
第一號
以テ改定
明治二十六年六月一日施行

同前

二 圖面ノ解説(圖面ヲ添フルトキハ)

三 發明ノ製作、構造、組成、及使用ノ方法等ニ關スル詳細ノ説明

四 發明ノ區域

五 發明人ノ族籍住所氏名

第六條 「圖面ニハ一圖毎ニ番號ヲ記シ其各部ニハ片假名平仮名又ハ數字ヲ付シテ明細書ノ説明ト符合セシメ且發明人ノ氏名ヲ記載スヘシ」

第七條 「條例第七條ニ依リ專賣權ノ讓與又ハ分與ヲ願出ルトキハ讓主ヨリ願書一通ニ約定書本書ヲ添ヘテ差出スヘシ其登録ヲ經タルキハ約定本書ニ登録濟ノ証印ヲ捺シ之ヲ下付スヘシ」

第八條 條例第八條ニ依リ追加專賣特許ヲ願出ル者ハ第二條及第三條ノ手續ニ從フヘシ

第九條 條例第九條第二項ノ特許ヲ受ケント欲スル者ハ其理由ヲ詳記シタル願書一通ヲ差出スヘシ

第十條 「專賣特許又ハ追加特許ヲ受クル者ハ其出願ヲ聞届クヘキ旨ノ通知ヲ得タル日ヨリ三十日以内ニ其特許料ヲ納ムヘシ此期限内ニ特許料ヲ納メサルキハ其出願無効タルヘシ但已テ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ムルキハ此限コアラズ

第十一條 條例第十三條ニ依リ專賣特許証ノ再渡ヲ願出ルキハ其理由ヲ詳記シタル願書一通

第六編 專賣特許手續條例

同前

同前

同前

通テ差出スヘシ

第十二條 專賣特許ヲ受ケタル者其願書明細書等ニ脱漏又ハ過誤ノルコトヲ發見シテ之ヲ補足又ハ改正セント欲スルトキハ其理由ヲ詳記シタル願書ニ通テ差出スヘシ

但し其補足又ハ改正ノ爲メ發明ノ重要事項ニ變更ヲ生スルモノハ之ヲ願出ルコトヲ得ス

第十三條 專賣特許ヲ受ケタル者約束ヲ以テ他人ニ其發明ヲ使用セシムルトキハ雙方連署シテ之ヲ届出ヘシ

第十四條 條例第四條第一項ニ觸レ專賣特許無効ニ歸シタル後先發明者更ニ專賣特許ヲ願出ルトキハ其年限ハ前專賣人ノ特許年限ヲ超ユヘカラス

同前

第十五條 「專賣特許願書」訂正ニ關シ達ヲ受ケタルトキハ其日ヨリ十五日以内ニ圖面ノ徵收又ハ訂正ニ關シ達ヲ受ケタルトキハ其日附ヨリ三箇月以内ニ明細書ニ關シ達ヲ受ケタルトキハ其日附ヨリ六箇月以内ニ訂正書圖面又ハ答辨書ヲ出スヘシ此期限内ニ之ヲ出ササルトキハ其出願無効タルヘシ但し已チ得サル事由アリテ延期シタルモノト認ムルトキハ此限ニアラス

同日追加

第十六條 專賣特許ニ關スル諸願書式明細書及圖面ノ雛形用紙等ハ別ニ告示スヘシ

(一一七)整理公債條例(明治十九年十月十六日勅令第六十六號布告)

第一條 整理公債ハ從前發行ノ六分以上利附ノ内國債ヲ償還整理スルガ爲メニ募集スルモノトス

第二條 整理公債ハ一億七千五百万圓ヲ限リ大藏大臣財政ノ便宜ヲ計リ漸次之ヲ募集スルモノトス

第三條 整理公債利子ノ割合ハ一箇年百分ノ五トス

第四條 整理公債ニ對シ發行スル證書ハ無記名利札附ニシテ五千圓千圓五百圓百圓五十圓ノ五種トス但し應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名スルコトヲ得

第五條 整理公債證書ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第六條 整理公債ヲ募集スルトキハ其總額價格應募申込日限應募金拂込度數等ハ大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第七條 整理公債應募高毎期需用ノ額ニ超過スルトキハ大藏大臣ハ應募價格ノ高キモノヨリ順次證書ヲ交付シ需要額ニ滿ルニ至テ止ム其價格同シキモノハ申込ノ高キ割合減少スルモノトス

第八條 整理公債應募金ノ拂込ヲ數回ニ分ツ場合ニ於テ拂込期ノ末日マテニ拂込未済ノモノアルトキハ其翌日ヨリ現拂込ノ日マテ一箇年百分ノ七ノ割合ヲ以テ利子ヲ徵收スヘシ前項拂込期日後三箇月ヲ過キ猶ホ拂込ヲ爲ササルトキハ公債證書ヲ交付セズ且既ニ拂込

ノ金額ハ還付セサルモノトス

第九條 整理公債元金ハ募集ノ年ヨリ五箇年据置其翌年ヨリ向五十箇年間ニ抽籤法ヲ以テ償還スルモノトス但償還金額ハ其時々大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第十條 整理公債元金償還ノ爲メ抽籤ヲ爲ストキハ日本銀行本店ニ於テ大藏省官吏三名以上會計検査院官吏二名以上日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行ス但整理公債證書額面三十万圓以上ヲ有スルモノハ抽籤ニ臨席スルコトヲ得

抽籤ノ後ハ日本銀行ヲシテ當籤證書ノ記號番號種類及ヒ金額等ヲ廣告セシムルモノトス

第十一條 整理公債ノ利子ハ毎年六月十二月ニ於テ支拂フモノトス

第十二條 整理公債ノ利子ハ其元金拂込ノ時月ノ十五日以前ニ在ルモノハ下半年分ヨリ支拂ヒ月ノ十六日以後ニ在ルモノハ翌月分ヨリ支拂ヒ元金償還ノ年ニ於テハ其償還ノ月マテ月割ヲ以テ支拂フモノトス

第十三條 整理公債證書ノ利札ハ利子請取ノ時其所有者各自之ヲ截斷シテ日本銀行本支店又ハ代理店ニ持參スヘシ

第十四條 整理公債元利ノ支拂ヲ請求セサルモノアルトキハ元金ハ償還ノ月ヨリ滿十五箇年利子ハ支拂ノ期月後滿五箇年ヲ過クレハ之ヲ支拂ハサルヘシ但證書ノ粉失汚染及ヒ毀損等ニ由リ元利ノ支拂ヲ見合セ及ヒ訴訟事件ニ由リ請求ヲ爲シ難キ場合アルトキハ其間

ノ日數ヲ算セス

第十五條 無記名證書ヲ記名ニ變換セントスルモノハ其請求書ニ戶長ノ與書ヲ受ケ證書ヲ添ヘ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出ヘシ

第十六條 記名證書ノ賣買讓渡ヲ爲シタルモノハ雙方連署ノ請求書ヲ添ヘ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十七條 記名證書ノ所有者死去シタルトキ其相續人ハ請求書ニ正當ノ相續人タルコトヲ證スル戶長ノ與書ヲ受ケ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 記名證書ノ所有者ノ遺旨ニ依リ相續人ニ非スシテ證書ヲ讓リ受クルモノアルトキハ右相續人ヲ以テ保證人ト爲シ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ但相續人ナキ場合ニ於テハ前所有者ノ親戚二名以上ヲ以テ保證人ト爲スヘシ

第十九條 記名證書ノ所有者身代限ノ處分ヲ受ケ證書ノ所有權他ヘ移轉シタルトキ其引受人ハ裁判所ノ證明書ヲ承ケ之ヲ證書ニ添ヘ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十條 整理公債證書若クハ其利札水火災等ニ由リ消滅シタルトキハ二名以上ノ保證人ヲ立テ日本銀行支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ届出代證書若クハ代利札ノ交付又ハ利子ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テ大藏省ハ其消滅ノ證跡明確ナリト認ムルトキハ直ニ代證書若クハ代利札ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ

第二十一條 整理公債證書又ハ利札ヲ紛失シタルモノハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ届出
ヘシ其發見ノ時亦同シ前項ノ届出アルトキハ銀行ハ直ニ其次第ヲ廣告スヘシ但廣告料ハ
届出人ヨリ納メシムルモノトス

第二十二條 公債證書又ハ利札紛失ノ届出アルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ之カ支
拂ヲ見合スヘシ

第二十三條 紛失届出ノ證書又ハ利札ヲ日本銀行本支店又ハ代理店ニ持參スルモツアル上
キハ銀行ハ之ヲ預リ置キ其旨ヲ届出人ニ報知シ持參人ト届出人ト相當ノ手續ヲ經テ所有
權ヲ證明スルヲ待テ其取扱ヲ爲スヘシ

第二十四條 記名證書紛失届出後一回ノ利拂了リタル上ハ二名以上ノ保証人ヲ立テ日本銀
行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出代證書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十五條 紛失無記名證書其届出ヨリ滿六箇年ヲ過キ紛失利札其支拂期限ヨリ滿四箇年
ヲ過キ猶ホ發見セサルトキハ届出人ニ代證書ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ但本文期限
ヲ過キテ紛失證書又ハ利札ヲ持參スルモノアルモ届出人ニ對シテノミ起訴ノ權アルモノ
トス

第二十六條 紛失證書ノ當籤ハ無効ノモノトス
第二十七條 整理公債證書ヲ汚染又ハ毀損シタルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由

シテ其證書ヲ大藏省ニ差出シ代證書ノ交付ヲ請求スルコトヲ得大藏省ニ於テ其真正ヲ鑒
別シ得ヘキモノニハ代證書ヲ交付シ鑒別シ難キモノニハ其取扱總テ紛失證書ノ例ニ準セ
シム

第二十八條 第十五條ノ證書交換ヲ受クルトキ第十六條第十七條第十八條第十九條ノ名前
書換ノトキ第二十條第二十四條第二十五條第二十七條ノ代證書ヲ受クルトキ及ヒ記名證
書ノ取扱店ヲ變更スルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ相當ノ手数料ヲ本人ヨリ納メ
シムルコトヲ得

第二十九條 第二十條第二十四條ノ保證人ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ満足スルモ
ノニ限ルヘシ

第三十條 従前發行ノ六分以上利附ノ公債證書ヲ所有スルモノハ元金償還ノ時本人ノ請求
ニ由リ大藏省ノ都合ヲ以テ整理公債證書ヲ交付スルコトアルヘシ
第三十一條 整理公債證書ノ製造費發行費及ヒ募集初年ノ利子ハ募集金ヲ以テ支出スルコ
トヲ得

第三十二條 整理公債ノ募集償還利子ノ拂渡證書ノ書換等ニ關スル取扱手續ハ大藏大臣之
ヲ定メ日本銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム

(一一八) 船燈信號器製造販賣規則 (明治十九年七月二十三日)

- 第一條 船燈船燈發火信號器星火ヲ發スル榴彈或ハ火筒信號器ヲ指ス製造セントスル者ハ其管轄廳ヲ經テ製造品ノ見本ヲ差出シ遞信省ノ許可ヲ受クヘシ
- 第二條 發火信號器ノ許可ヲ乞フトキハ製造人又ハ代理人各種共十箇以上ノ見本ヲ携帶シテ遞信省ノ試験ヲ受クヘシ但試験入費ハ出願人ヲシテ負擔セシム
- 第三條 遞信省ハ船燈發火信號器ノ見本ヲ合格ト見認ムルトキハ管轄廳ヲ經テ製造免許證ヲ下付スヘシ
- 第四條 免許製造ノ船燈發火信號器ニハ其製造人ノ氏名ヲ彫刻又ハ貼付スヘシ
- 第五條 免許製造ノ船燈發火信號器ヲ販賣セントスル者ハ其管轄廳ノ許可ヲ受クヘシ但免許製造人ニ於テ販賣スルハ此限ニアラス
- 第六條 船燈發火信號器ノ製造又ハ販賣免許ヲ受ケタル者ハ各其氏名製造所又ハ販賣所名ヲ新聞紙ニテ廣告シ且ツ其製造所販賣所ニハ看板ヲ掲クヘシ
- 第七條 免許製造人其籍ヲ轉シ若クハ氏名ヲ變スルトキハ管轄廳ヲ經テ免許證ノ書換ヲ願出ツヘシ但其廢業死亡ノ時ハ免許證ヲ返納スヘシ
- 第八條 船燈發火信號器製造人ノ員數ハ遞信省ニ於テ之レヲ制限ス其販賣人ノ員數ハ地方ノ實況ニ應ジ管轄廳ニ於テ之ヲ増減スルヲ得ヘシ

第九條 遞信省又ハ地方廳ニ於テハ免許製造所及ヒ販賣所へ不時ニ吏員ヲ派出シ其製器ノ適否ヲ監査シ場合ニ依リ之ヲ實試スルコトアルヘシ

第十條 不合格ノ製器ハ監査官吏ニ於テ其改造ヲ命ジ或ハ販賣若クハ使用ヲ停止スルコトアルヘシ

第十一條 不合格ノ船燈發火信號器ヲ製造又ハ販賣スル者アルトキハ遞信省又ハ地方廳ニ於テ其營業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

第十二條 第四條第五條ヲ犯スモノハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

(一一九) 漉入紙製造取締規則 (明治二十年七月二十三日)

第一條 文字畫紋ヲ漉入レタル紙ヲ製造スル者ハ現品ノ見本ヲ添へ管轄廳東京府ハニ届出ツヘシ違フ者ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二條 紙幣兌換銀行券公債證書大藏省證券其他政府發行ノ證券ニ類似ノ文字畫紋又ハ凸ニ文字畫紋ヲ漉入レタル紙ヲ人民ニ於テ製造スルコトヲ得ス違フ者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三條 此規則ハ本年九月一日ヨリ施行ス

明治二十年八月十六日大藏省令第十二號

第六編 船燈信號器製造販賣規則 漉入紙製造取締規則

文字書紙ヲ流入レタル紙ヲ製造スル者ハ一種毎ニ現品ニ葉ヲ添ヘ左ノ雛形ニ據リ届書ニ
通テ管轄廳東京府ハニ差出スヘシ管轄廳又ハ警視廳ハ一通ヲ留メ置キ一通ヲ當省ニ遞達ス
ルモノトス

雛形

(用紙半紙)

流入紙製造届

一何々流入紙

右製造仕候間現品相添此段御届仕候也

年月日

廳府縣長官宛

貫籍

何

某印

明治法規大全下卷終

明治二十年六月三日版權免許

明治二十一年六月七日印刷

全 年七月七日出版 定價金一圓五十錢

編纂人

山口縣士族

河村幸雄

發弘人

福井縣平民

小川寅松

印刷人

東京府平民

松本秋齋

京都府平民

辻本九兵衛

京橋區南傳馬町壹丁目

本郷區湯島壹丁目十三番地

東京京橋區南紺屋町一番地

福岡縣福岡天神町八十四番地

特別大賣捌處

東京神田錦町壹丁目

時習社

全 全 裏神保町

明法堂

大阪北久太郎町四丁目

柳原喜兵衛

全 備後町四丁目

吉岡平介

尾州名古屋本町

片野東四郎

全 全 本町

川瀬代介

近江國大津升屋町

小川儀平

京都三條東舊院北

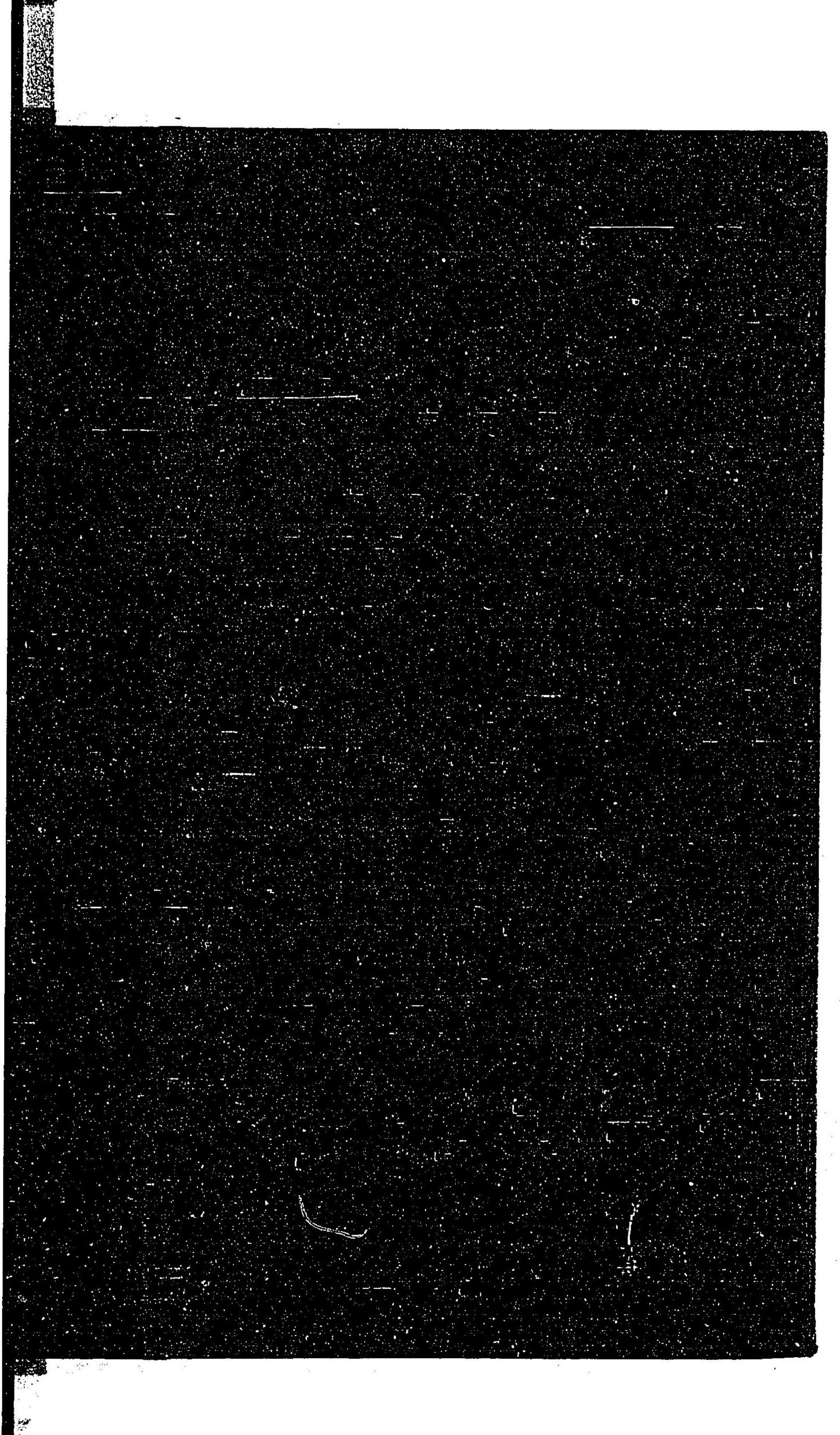
村上勘兵衛

全 南町四條北

田中次兵衛

1301
4

147
26



14.7
26

禁電子式複写

28. 3. 24